

第1回 しずおか世界翻訳コンクール 1996-1997, 静岡

The 1st International
Translation Competition in Shizuoka
1996-1997, Shizuoka, Japan



翻訳課題図書
Texts for Translation

応募規定

a. 翻訳課題図書

左記の小説(短篇)3篇と評論3篇から、それぞれ1篇ずつを選択する。ただし、「みちづれ」と「じねんじょ」は、併せて1篇とする。

b. 翻訳言語

英語及び仏語のうち、一言語を選択する。

c. 応募期間

1996年12月31日(火)までに下記応募先に到着したものを有効といたします。

応募先 伊豆文学フェスティバル実行委員会事務局
〒420 静岡県静岡市追手町9-6
静岡県教育委員会文化課文化企画室

小説

『二三羽—二三羽』

泉 鏡花

3

『泉鏡花全集第二十七卷』岩波書店

『一家団欒』

藤 枝 静 男

21

『藤枝静男著作集第六卷』講談社

『みちづれ』／『じねんじょ』

三 浦 哲 郎

32

『みちづれ』新潮社

評論

『近代日本における「愛」の虚偽』

伊 藤 整

44

『近代日本人の発想の諸形式』岩波書店

『虚虚実実』

外 山 滋比古

54

『近代読者論』みすず書房

『傾いた砂時計のような話』

吉 田 直 哉

63

『夢うつつの図鑑』文藝春秋

文字づかいについて

各作品の表記を統一するため、なるべく原文を尊重しつつ、本文の表記を次のように改めた。ただし、送りがなは原文どおりとした。

- (一) 旧かなづかいで書かれているものは現代かなづかに改めた。
- (二) 旧漢字で書かれているものは新字体に改めた。
- (三) 漢字には振りがなをつけた。

二三羽 — 十二三羽

大正十三年四月

引越しをする毎に、「雀は何うしたろう。」もう八十幾つで、耳が遠かった。——その耳を熟と澄ますようにして、目をうつとりと空を視て、火桶にちよこんと小さく居て、「雀は何うしたろうの。」引越しをする毎に、祖母の然う咬いたことを覚えて居る。「祖母さん、一所に越して来ますよ。」当てづっぱに気安めを言うと、「お、然うかの。」と目皺を深く、ほくほくと頷いた。

其のなくなった祖母は、いつも佛の御飯の残りだの、洗いながしのお飯粒を小窓に載せて、雀を可愛がつて居たのである。

私たちの一向に気のない事は、——はれて雀のものがたり——そらで嵐雪の句は知って居ても、今朝も囀つた、と心に留めるほどではなかった。が、少からず愛惜の念を生じたのは、同じ麴町だが、土手三番町に住つた頃であつた。春も深く、やがて梅雨も近かつた。……庭に柿の老樹が一株。遣放しに手入れをしないから、根まわり雑草の生えた飛石の上を、ちよこちよことよりは、ふよふよと雀が一羽、羽を広げながら歩行いて居た。家内がつかつかと跣足で下りた。いけずな女で、確に小雀を認めたらしい。チチチチ、チュ、チュツ、すぐに掌の中に入った。「引摺んじや不可い、そつとそつと。」此が鶯か、かなりやだと、伝統的にも世間体にも、それ鳥籠をと、内にはないから買いに出る処だけれど、相手が、のりを舐める代もので、お安く扱われつけて居るのだから、台所の目簾で其の南の縁へ先ず伏せた。——処で、生提つて籠に入れると、一時と経たないうちに、すぐに薩摩芋を突ついたり、柿を吸つたりする、目白鳥のように早く人馴れをするのではない。雀の児は容易く餌につかぬと、祖母にも聞いて知って居たから、此のまだ草にふらついて、飛べもしない、ひよわなものを、飢えさしては成らない。——屹と親雀が来て餌を飼おう。それには、縁では可恐がるだろう。……で、もとの飛石の上へ伏せ直した。

母鳥は直ぐに来て飛びついた。もう先刻から庭樹の間を、けたたましく鳴きながら、彼方へ飛び、此方へ飛び、飛騨いでいたのであるから。

障子を開けたままで覗いて居るのに、仔の可愛さには、邪険な人間に対する恐怖も忘れて、目筈の周囲を二三尺、はらはらくるくると廻って飛ぶ。ツツと筈の目へ嘴を入れたり、颯と引いて横に飛んだり、飛びながら上へ舞立ったり。其のたびに、筈の中の仔雀のあこがれようと言ったらない。あの声がキイと聞えるばかり鳴き縋って、引切れそうに胸毛を震わす。利かぬ羽を渦にして抱きつこうとするのは、おっかさんが、嘴を筈の目に、その……ツツと入れては、ツイと引く時である。

見ると、小さな餌を、虫らしい餌を、親は嘴に銜えて居るのである。筈の中には、乳離れをせぬ嬰兒だ。火のつくように泣立てるのは道理である。処で筈の目を潜らして、口から口へ哺めるのは——人間の方でも其の計略だったのだから——いとも容易い。

だのに、餌を見せながら鳴き叫ばせつつ身を退いて飛廻るのは、あまり利口でない人間にも的確に解せられた。「あかちゃんや、あかちゃんや、うまうまをあげましょう。其処を出ておいで。」と言うのである。他の手に封じられた、仔は何うして、自分で筈が抜けられよう？親は何うして、自分で筈を開けられよう？其の思は何うだろう。

私たちは、しみじみ、いとしく可愛く成ったのである。

石も、折箱の蓋も撥飛ばして、筈を開けた。「御免よ。」と、雀の方より、此方が顔を見合わせて、悄気げつつ座敷へ引込んだ。

少々極が悪くって、しばらく、背戸へ顔を出さなかった。

庭下駄を揃えてあるほどの所帯ではない。玄関の下駄を引抓んで、晩方背戸へ出て、柿の梢の一つ星を見ながら、「あの雀は何うしたろう。」ありたけの飛石——と言っても五つばかり——を漫に渡ると、湿けた窪地で、すぐ上が葱や苔、龍の髯の石垣の崖に成る、片隅に山吹があつて、こんもりした躑躅が並んで植つて居て、垣となりの灯が、ちらちらと透くほどに二三輪咲残った……その茂った葉の、蔭も深くはない低い枝に、雀が一羽、たよりなげに宿って居た。正に前刻の仔に違いない。……様子が、土から僅か二尺ばかり。これより上へは立てないので、ここまで連れて来た女親が、わりのう預けて行ったものらしい……敢て預けて行ったと言いたい。

悪戯を詫びた私たちの心を汲んだ親雀の気の優しさよ。……その親たちの時は何処？……この嬰兒ちゃんは寂しそうだ。

土手の松へは夜鷹が来る。築土の森では木兎が鳴く。……折から宵月の頃であつた。親雀は、可恐いもの目に触れないように、成るだけ、葉の暗い中に隠したに違いない。もとより藁屑も綿片もあるのではないが、薄月が映すともなしに、ぼっと、その仔雀の身に添って、霞のような気が籠って、包んで円く明かったのは、親の情の朧気ならず、輪光を顕わした影であらう。「一寸」「何さ」「手招ぎをして、「来て見なよ。」家内を呼出して、両方から、そっと、顔を差寄せると、じっとしたのが、微に黄色な嘴を傾けた。この柔な胸毛の色は、さし覗いたものの襟よりも白かった。

夜ふかしは何、家業のようだから、その夜はやがて明くるまで、野良猫に注意した。彼奴が後足で立てば届く、低い枝に、預ったからである。

朝寝はしたし、ものに紛れた。午の庭に、隈なき五月の日の光を浴びて、黄金の如く、銀の如く、飛石の上から、柿の幹、躑躅、山吹の上下を、二羽縦横に飛んで舞って居る。ひらひら、ちらちらと羽が輝いて、三寸、五寸、一尺、二尺、草樹の影の伸びるとともに、親雀につれて飛び習う、仔の翼は、次第に、次第に、上へ、上へ、自由に軽く成って、卵の花垣の丈を切るのが、四五度馴れると見るうちに、崖をなぞえに、上町の樹の茂りの中へ飛んで見えなく成った。

真綿を黄に染めたような、あの翼が、倏う速に飛ぶのに馴れるか。且つ感じつつ、私たちは飽かずに視めた。あとで、台所からかけて、女中部屋の北窓の小窓の小縁に、行ったり、来たり、出入りするの、五六羽、八九羽、どれが、その親と仔の二羽だかは紛れて知れない。

——二三羽、五六羽、十羽、十二三羽。ここで雀たちの数を言った次手に、それぞれの道の、学者方までもない、一寸わけ知りの御人に伺いたい事がある。

別の儀でない。雀の一族は、おなじ場所では余り沢山には殖えないものなのであろうか知ら？御存じの通り、稲塚、稲田、粟黍の実る時は、平家の大軍を走らした水鳥ほどの羽音を立てて、啜行き、畔行くものを驚かす、

夥多しい群団を為す。鳴子も引板も、半ば——此がための備だと思ふ。むかしのもの語にも、年月の経る間には、おなじ背戸に、孫も彦も群る筈だし、第一椋鳥と塒を賭けて戦う時の、雀の軍勢を思いたい。よしそれは別として、長年の間には、もう些と家族が栄えようと思ふのに、十年一日と言ふが、実際、——その土手三番町を、やがて、いまの家へ越してから十四五年になる。——あの時、雀の親子の情に、いとしさを知って以来、申出るほどの、さしたる御馳走でもないけれど、お飯粒の少々は毎日欠かさず撒いて置く。たとえば旅行をする時でも、……「火の用心」と、「雀君を頼むよ」……だけは、留守へ言つて置くくらいだが、さて、何年にも、一寸来て二羽三羽、五六羽、総勢すぐつて十二三羽より数が殖えない。長者でもない癖に、俵で扶持をしないからだ、言われれば其までだけれど、何、私だって、もう十羽殖えたぐらいは、それだけ御馳走を増すつもりで居るのに。

何も、雀に託けて身代の伸びない愚痴を言うのではない。又……別に雀の数の多く成る事ばかりを望むのではないのであるが、春に、秋に、現に目に見えて五六羽ずつは親の連れて来る子の殖えるのが分つて居るから、いつも同じほどの数なのは、何処へ行つて、何うするのだらうと思ふからである。

が、何うも様子が、仔雀が一羽だちの出来るのを待つて、その小児だけを宿に残して、親雀は塒をかえらしく思われる。

あの、仔雀が、チイチイと、ありツたけ嘴を赤く開けて、クリスマスに貰つたマントのように小羽を動かして、胸毛をふよふよと揺がせて、恁う仰向いて強請ると、あいよ、と言つた顔色で、チチツ、チチツと幾度もお飯粒を嘴から含めて遣る。……食べても強請る。ふくめつつ、後ねだりをするのを機掛に、一粒銜えて、お母さんは塒の上——（椿の枝下で茲にお飯が置いてある）——其処から、裏露地を切つて、向うの瓦屋根へフツと飛ぶ。とあとから仔雀がふわりと縋る。これで、羽を馴らすらしい。また一組は、おなじく餌を含んで、親雀が、狭い庭を、手水鉢の高さぐらいに舞上ると、その胸のあたりへ附着くように仔雀が飛上る。尾を地へ着けないで、舞いつつ、飛びつつ、庭中を翔廻りなどもする、矢張り羽を馴らすらしい。此の舞踏が一斉に三組も四組もはじまる事がある。卯の花を搔乱し、萩の花を散らして狂う。……かわいいのに目がないから、春も秋も

一所だが、晴の遊戯だ。もう些と、綺麗な窓掛、絨毯を飾つても遣りたいが、庭が狭いから、羽とともに散りこぼれる風情の花は沢山ない。却って羽について来るか、嘴から落すか、植えない堇の紫が一本咲いたり、蓼が穂を紅らめる。

処で、何のなかでも、親は甘いもの、仔はずるく甘ツたれるもので。……あの胸毛の白いのが、見て居ると、そのうちに立派に自分で餌が拾えるようになる。澄ました面で、コッソンなどと高慢に食べて居る。いたずらものが、二三羽、親の目を抜いて飛んで来て、チユツチユツチユツとつき合の喧嘩さえ遣る。生意気にも係らず、親雀がスーツと来て叱るような顔をする、喧嘩の嘴も、生意気な羽も、忽ちぐにやぐにやに成って、チイチイ、赤坊声で甘ったれて、餌を頂戴と、口を張開いて胸毛をふわふわとして待構える。チチツ、チチツ、一人でお食ふなと言つても肯かない。頬辺を横に振つても肯かない。で、チイチイチイ……おなかが空いたの。……おお、よちよち、と言つた工合に、此の親馬鹿が、すぐにのろく成って、お飯粒の白い処を——贅沢な奴等で、内のは挽割麦を交ぜるのだが余程腹がすかないと麦の方へは嘴をつけぬ。此奴等、大地震の時は弱つたぞ——啄んで、嘴で、仔の口へ、押込み揉込むようにするのが、凡そ堪らないと言つた形で、頬摺りをするように見える。

怪しからず、親に苦勞を掛ける。……その癖、他愛のないもので、陽氣がよくて、お腹がくちいと、うとうとと成って居睡をする。……さあさあ一きり露台へ出ようか、で、塀の上から、揃つてもの干へ出たとお思ひなさい。日のほかほかと一面に当る中に、声は噪ぎ、影は踊る。

すてきに物干が賑だから、密と寄つて、隅の本箱の横、二階裏の肱掛窓から、まぶしい目をぱちくりと遣つて覗くと、柱からも、横木からも、頭の上の小廂からも、暖な影を湧かし、羽を光らして、一斉にパツと逃げた。

飛ぶのは早い、裏邸の大枇杷の樹までさしわたし五十間ばかりを瞬く間もない。

——（此の枇杷の樹が、

馴染の一家族の塀なので、前通りの五本ばかりの桜の樹（有島家）にも一群巢を食つて居るのであるが、その組は私の内へは来ないらしい、持場が違ふと見える）——時に、女中がいけぞんざいに、取込む時引外したままの掛棹が、斜違いに落ちて居た。硝子一重すぐ鼻の前に、一羽可愛いのが真正面に、ぱかんと留まって残つて

居る。——どうかして、座敷へ飛込んで戸惑いするのを掴めると、掌で暴れるから、此のくらい、しみじみと雀の顔を見た事はない。ふつくりとも、ほっかりとも、細い毛へ一つずつ日光を吸込んで、おお、お前さんは飴で出来て居るのではないかい、と言いたいほど、とろんとして、目を眠って居る。道理こそ、人の目と、其の嘴と打撞りそうなのに驚きもしない、と見るうちに、踏えて留った小さな脚がひよいと片脚、幾度も下へ離れて迂りかかると、その時はビクリと居直る。……煩って動けないか、怪我をして居ないかな。……

以前、あしかけ四年ばかり、相州逗子に住った時（三太郎）と名づけて目白鳥が居た。

桜山に生れたのを、おとりで捕った人に貰ったのであった。が、何処の巢に居て覚えたろう、鴨、駒鳥、あの辺にはよく居る頬白、何でも囀る……ほうほけきよ、ほけきよ、ほけきよ、明かに鶯の声を鳴いた。目白鳥としては駄鳥か何うかは知らないが、私には大の、ご秘蔵——長屋の破軒に、水を飲ませて、芋で飼ったのだから、笑って故と（ご）の字をつけておく——またよく馴れて、殿様が鷹を据えた格で、掌に置いて、それとみせると、パツと飛んで虫を退治した。また、冬の日のわびしさに、紅椿の花を炬燵へ乗せて、籠を開けると、花を被って、蜜を吸いつつ嘴を真黄色にして、掛蒲団の上を押廻った。三味線を弾いて聞かせると、音に競って軒で高囀りする。寂しい日に客が来て話をし出すと障子の外で負けまじと鳴きしきる。可愛いもので。……可愛いに付けて、断じて籠には置くまい。秋雨のしよぼしよぼと降るさみしい日、無事なようにと願い申して、岩殿寺の観音の山へ放した時は、煩って居た家内と二人、悄然として、ツイーツイーと梢を低く坂下りに樹を伝って慕い寄る声を聞いて、ほろりとして、一人は袖を濡らして帰った。が、——其の目白鳥の事で。……（寒い風だよ、ちよぼ一風は、しわりごわりと吹いて来る）と田越村一番の若衆が、泣声を立てる、大根の煮える、富士おろし、西北風の烈しい夕暮に、いそがしいのと、寒いのに、向うみずに、がたりと、門の戸をしめた勢で、軒に釣った鳥籠をがたり、ボタンと撥返した。アツと思うと、中の目白鳥は、羽ばたきもせず、横木を転がけて、落葉の挟ったように落ちて縮んで居る。「しまった、……三太郎が目まわした。」「まあ、大変ね。」と襷がけのまま庖丁を、投げ出して、目白鳥を掌に取って据えた婦は目に一杯涙を溜めて、「何うしましょう。」其、其の

時だ。試に手水鉢の水を柄杓で切つて霽にして、露にして、目白鳥の嘴を開けて含まして、襟をあけて、膚につけて暖めて、しばらくすると、ひくひくと動き出した。ああ助りました、御利益と、岩殿の方へ籠を開いて、中へ入れると、あわれや、横木へつかまり得ない。おっこちるのが可恐いのか、隅の、隅の、狭い処で小さく成つた。あくる日一日は、些と、ご惱気と言つた形で、摺餌に嘴のあとを、ほんの筋ほどつけたばかり。但し完全に蘇生つた。

此の経験がある。

水でも飲まして遣りたいと、障子を開けると、其の音に、怪我処か、わんぱくに、しかも二つばかり廻つて飛んだ。仔雀は、うとりうとりと居睡をして居たのであった。……憎くない。

尤もなかなかの悪戯もので、逗子の三太郎……其の目白鳥——がお茶の子だから雀の口真似をした所為でもあるまいが、日向の縁に出して人の居ない時は、籠のまわりが雀どもの足跡だらけ。秋晴の或日、裏庭の茅葺小屋の風呂の廂へ、向うへ桜山を見せて掛けて置くと、午少し前の、いい天気で、閑な折から、雀が一羽、……丁ど目白鳥の上の廂合の樋竹の中へすぱりと入って、ちょっと黒い頭だけ出して、上から籠を覗込む。嘴に小さな芋虫を一つ銜え、あっち向いて、こっち向いて、ひよいひよいと見せびらかすと、籠の中のは、恋人から来た玉章ほどに欲しがって駈上り飛上つて取ろうとすると、ひよいと面を横にして、また、ちよいちよいと見せびらかす。いや、いけずなお転婆で。……処がはずみに掛けて振った拍子に、その芋虫をポタリと籠の目へ、落したから可笑い。目白鳥は澄まして、ペロリと退治た。吃驚仰天した顔をしたが、ぽんと樋の口を突出されたように飛んだもの。

瓢箪に宿る山雀、と言う謡がある。雀は樋の中がすきらしい。五六羽、また、七八羽、横にずらりと並んで、顔を出して居るのが常である。

或殿が領分巡回の途中、菊の咲いた百姓家に床几を据えると、背戸畑の梅の枝に、大な瓢箪が釣るしてある。梅見と言う時節でない。

「これよ、……あの、瓢箪は何に致すのじゃな。」

その農家の親仁が、

「へいへい、山雀の宿にござります。」

「ああ、風情なものじゃの。」

能の狂言の小舞の謡に、

いたいけしたるものあり。張子の顔や、練稚児。しゆくしや結びに、ささ結び、やましな結びに風車。
瓢箪に宿る山雀、胡桃にふける友鳥……

「いまはじめて相分った。——些少じゃが餌の料を取らせよう。」

小春の麗な話がある。

御前のお目にとまった、謡のままの山雀は、瓢箪を宿とする。此方人等の雀は、棟割長屋で、樋竹の相借家だ。

腹が空くと、電信の針がねに一座ずらりと出て、ぼちぼちと中空高く順に並ぶ。中でも音頭取が、電柱の頂辺に一羽留って、チイと鳴く。これを合図に、一斉にチイと鳴出す。——塀と枇杷の樹の間に当って。で

御飯をくれろと、催促をするのである。

私が即ち取次いで、

「催促てるよ、催促てるよ。」

「せわしないのね。……煩いよ。」

などと言いながら、茶碗に装って、婦たちは露地へ廻る。此が此のうえ後れると、勇悍なのが一羽押寄せる。馬に乗った勢で、小庭を縁側へ飛上って、ちよん、ちよん、ちよんちよんと、雀あるきに扉を抜けて台所へ入って、お竈の前を廻るかと思うと、上の引窓へパツと飛ぶ。

「些と自分でもお働き、虫を取るんだよ。」

何も、肯分けるのでもあるまいが、言の下に、萩の小枝を、花の中へすらすら、葉の上はさらさら……あの撓々とした細い枝へ、塀の上、椿の樹からトンと下りると、下りたなりにすっと這って、一寸末を余して垂下る。

すぐに、くるりと腹を見せて、葉裏を潜つてひよいと攀じると、また一羽が、おなじように塀の上からトンと下りる。下りると、すつと枝に撓つて、ぶら下るかと思うと翻然と伝う。又一羽が待兼ねてトンと下りる。一株の萩を、五六羽で、ゆさゆさ揺つて、盛の時は花もこぼさず、嘴で銜えたり、尾で跳ねたり、横顔で覗いたり、慥くして、裏おもて、虫を漁りつつ、滑稽けてはずんで、ストンと落ちるかとする、羽をひらひらと宙へ踊つて、小枝の尖へひよいと乗る。

水上さんが此を聞いて、莞爾して勧めた。

「鞆を拵えてお遣なさい。」

邸の庭が広いから、直ぐにここへ気がついた。私たちは思いも寄らなかつた。糸で杉箒を結えて、其の萩の枝に釣つた。……此の趣を乗気で饒舌ると、雀の興行をするようだから見合わせる。が、鞆に乗つて、瓢箪ぶつくりこ、なぞは何でもない。時とすると、塀の上に、いま睦しく二羽啄んで居たと思う。その一羽が、忽然として姿を隠す。飛びもしないのに、おやおやと人間の目にも隠れるのを、……慥う搜すと、いま居た塀の笠木の、すぐ裏へ、頭を揉込むようにして縦に附着いて居るのである。脚がかりもないのに巧なもので。——然うすると、見失つた友の一羽が、怪訝な様子で、チチと鳴き鳴き、其処らを覗くが、その笠木の一寸した出張りの咽に、頭が附着いて居るのだから、どっちを覗いても、上からでは目に附かない。チチツ、チチツと少時捜して、パツと枇杷の樹へ飛んで帰ると、そのあとで、密と頭を半分出してきよろきよろと見ながら、嬉しそうに、羽を揺つて後から颯と飛んで行く。……惟うに、人の子のするかくれんぼである。

さて、慥うたわいもない事を言つて居るうちに——前刻言つた——子どもが育つて、ひとりだち、ひとり遊びが出来るように成ると、胸毛の白いのばかりを残して、親雀は何処へ飛ぶのか居なく成る。数は増しもせず、減りもせず、同じく十五六羽どまりで、そのうちには、芽が葉になり、葉が花に、花が実になり、雀の咽が黒く成る。年々三度おんなじなのである。

……妙な事は、いま言つた、萩または椿、朝顔の花、露草などは、枝にも蔓にも馴れ馴染んで居るらしい……と言ふよりは、親雀から教えられて居るらしい。——が、見馴れぬものが少しでもあると、可恐がつて近づか

ぬ。一日でも二日でも遠くの方へ退いて居る。尤も、時には此方から、故とおいでの方へ退いて居る。物干へ蒲団を干す時である。

お嬢さん、お坊ちゃんたち、一家揃って、いい心持に成って、ふっくりと、蒲団に団欒を試みるのだから堪らない。ぼとぼと、あとが、ふんだらけ。此には弱る。其処で工夫をして、他所から頂戴して貯えて居る豹の皮を釣って置く。と枇杷の宿に居すくまって、裏屋根へ来るのさえ、おっかなびっくり、(坊主びっくり貂の皮)だから面白い。

が、一夏縁日で、月見草を買って来て、萩の傍へ植えた事がある。夕月にあの花が露を香わせてぱつと咲くと、いつも此の黄昏には、一時留り餌に騒ぐのに、ひそまり返って一羽だって飛んで来ない。はじめは怪しんだが、二日め三日めには心着いた。意気地なし、臆病。烏瓜、夕顔などは分けても知己だろうに、はじめて咲いた月見草の黄色な花が可恐いらしい……可哀相だから植替えようかと、言ううちに、四日めの夕暮頃から、漸々と出て来た。何、一度味をしめると飛ついて露も吸いかねぬ。

まだある。土手三番町の事を言った時、卯の花垣をなどと、少々調子に乗ったようだけれど、まったく其の庭に咲いて居た。土地では珍しいから、引越す時一枝折って来てさし芽にしたのが、次第に丈たく生立ちはしたが、葉ばかり茂って、蕾を持たない。丁ど十年目に、一昨年の卯月の末にはじめて咲いた、それも塀を高く越した日当のいい一枝だけ真白に咲くと、其の朝から雀がバツタリ。意気地なし。また丁ど其の卯の花の枝の下に御飯が乗って居る。前年の月見草で心得て、此の時は澄まして居た。やがて一羽ずつ密と来た。忽ち卯の花に遊ぶこと萩に戯るるが如しである。花の白いのにさえ怯えるのであるから、雪の降った朝の臆病思うべしで、枇杷塚と言いたい、むこうの真白の木の丘に埋れて、声さえ立てないで可哀である。

椿の葉を払っても、飛石の上を掻分けても、物干に雪の溶けかかった処へ餌を見せても影を見せない。炎天、日盛の電車道には、焦げるような砂を浴びて、蟪蛄の斧と言った強いのが普通なのに、此はどうしたものであろう。……はじめ、ここへ引越したてに、一二年居た雀は、雪なんぞは驚かなかった。山を兎が飛ぶように、雪を糞にして、吹雪を散らして翔けたものを――

ここで思う。其の児、その孫、二代三代に到って、次第おくり、追続ぎに、おなじ血筋ながら、いつか、黄色な花、白い花、雪などに対する、親雀の申しふくめが消えるのであらうと思う。

泰西の諸国にて、その公園に群る雀は、パンに馴れて、人の掌にも帽子にも遊ぶと聞く。

何故に、わが背戸の雀は、見馴れない花の色をさえ恐るるのであらう。実に花なればこそ、些とでも変った人間の顔には、彼等は大なる用心をしなければならぬ。不意の礫の戸に当る事幾度ぞ。思いも寄らぬ蜜柑の皮、梨の核の、雨落、鉢前に飛ぶのは数々である。

牛乳屋が露地へ入れば驚き、酒屋の小僧が「今日は」を叫べば逃げ、大工が来たと見ればすくみ、屋根屋が来ればひそみ、畳屋が来ても寄りつかない。

いつかは、何かの新聞で、東海道の何某は雀うちの老手である。並木づたいに御油から赤坂まで行く間に、雀の獲もの約一千を下らないと言うのを見て戦慄した。

空気銃を取って、日曜の朝、ここの露地口に立つ、狩服の若い紳士たちは、失礼ながら、犬ころしに見える。

去年の暮にも、隣家の少年が空気銃を求め得て高く捧げて歩行いた。隣家の少年では防ぎ難い。おつかいものは、ただ煎餅の袋だけれども、雀のために、うちの小母さんが折入って頼んだ。

親たちが笑って、

「お宅の雀を狙えば、銃を没収すると言う約束です。」

嘗て、北越、俱利伽羅を汽車で通った時、峠の駅の屋根に、車のとどろくにも驚かず、雀の日光に浴しつつ、屋根を自在に、樋の宿に出入りするのを見て、谷に咲残った撫子にも、火牛の修羅の巷を忘れた。——古戦場を忘れたのが可いのではない、忘れさせたのが雀なのである。

モウパッサンが普仏戦争を題材にした一篇の読みだしは、「巴里は包囲されて餓えつつ悶えて居る。屋根の上に雀も少くなり、下水の埃も少くなった。」と言うのではなかったか。

雪の時は——見馴れぬ花の、それとは違って、天地を包む雪であるから、もし此に恐れたと成ると、雀のた

めには、大地震以上の天変である。東京のは早く消えるから可いものの、五日十日積るのには何うするだろう。半歳雪に埋もるる国もある。

或時も、また雪のために一日形を見せないから、……真個の事だが案じて居ると、次の朝の事である。ツイと寂しそうに鳴いて、目白鳥が唯一羽、雪を被いで、紅に咲いた一輪、寒椿の花に来て、ちらちらと羽も尾も白くしながら枝を潜った。

炬燵から見て居ると、しばらくすると、雀が一羽パツと来て、おなじ枝に、花の上下を、一所に廻った。続いて三羽五羽、一斉に皆来た。御飯はすぐ嘴の下にある。パツパ、チイチイ諸きほいに歓喜の声を上げて、踊りながら、飛びながら、啄むと、今度は目白鳥が中へ交った。雀同士は、突合って、先を争って狂っても、その目白鳥にはおとなしく優しくかった。そして目白鳥は、欲しそうに、不思議そうに、雀の飯を視めて居た。私は何故か涙ぐんだ。

優しい目白鳥は、花の蜜に恵まれよう。——親のない雀は、うつくしく愛らしい小鳥に、教えられ、導かれて、雪の不安を忘れたのである。——それにつけても、親雀は何処へ行く。——

——去年七月の末であつた。……余り暑いので、愚に返って、恚う何うも、おお暑いでめげては不可い。小児の時は、日盛に蜻蛉を釣ったと、炎天に打つかる気で、そのまま日盛を散歩した。

その気の次手に、……何となく、其処等屋敷町の垣根を探して（ごんごんごま）が見たかったのである。此の名からして小児で可い。——私は大好きだ。スズメノエンドウ、スズメウリ、スズメノヒエ、姫百合、姫萩、姫紫苑、姫菊の臍たけた称に対して、スズメの名のつく一列の雑草の中に、此のごんごんごまを、私はひそかに「スズメの蜚蠊」と称して、内々鼻根で居る。

分けて、盂蘭盆のその月は、墓詣の田舎道、寺つづきの草垣に、線香を片手に、此のスズメの蜚蠊、ごんごんごまを摘んだ思出の可懐さがある。

然も其の癖、卑怯にも片陰を拾い拾い小さな社の境内だの、心当の、邸の垣根を覗いたが、前年の生垣も煉瓦にかわったのが多い。——清水谷の奥まで掃除が届く。——梅雨の頃は、闇黒に月の影がさしたほど、彼方此方に目に着いた紫陽花も、此の二三年こっち最う少い。——荷車のあとには芽ぐんでも、自動車の轍の下には生えまいから、いまは車前草さえ直ぐには見ようたつて間に合わない。——
で、何処でも、あの、珊瑚を木乃伊にしたような、ごんごんごまは見当らなかった。——ないものねだりで、尚お欲い、歩行くうちに汗を流した。

場所は言うまい。が、向うに森が見えて、樹の茂った坂がある。……私が覚えてからも、むかし道中の茶屋旅籠のような、中庭を行抜けに、土間へ腰を掛けさせる天麩羅茶漬の店があった。——その坂を下りかかる片側に、坂なりに落込んだ空溝の広いのがあって、道には破朽ちた柵が結ってある。其の空溝を隔てた、葎を其のまま斜違いに下る藪垣を、むこう裏から這って、茂って、またたとえば、瑪瑙で刻んだ、ささ蟹のようなスズメの蠟燭が見つかった。

つかまえて支えて、乗出しても、溝に隔てられて手が届かなかった。

杖の柄で搔寄せようとするが、迂る。——がささと遣って居ると、目の下の枝折戸から——こんな処に出入口があったかと思う——葎戸の扉を明けて、円々と肥った、でっぷり漢が仰向いて出た。きびらの洗いざらし、漆紋の元げたのを被たが、肥って大いから、手足も腹もぬつと露出て、ちゃんちゃんを被ったように見える、逞ましい肥大漢の柄に似合わず、おだやかな、柔和な声して、

「何か、おとしものでもなされたか、拾ってあげましようかな。」

と言った。四十ぐらいの年配である。

私は一応挨拶をして、わけを言わなければ成らなかった。

「ははあ、ごんごんごま、……お薬用か、何か禁厭にでもなりますので？」

とに角、路傍だし、埃がして居る。裏の崖境には、清浄なのが沢山あるから、御休息かたがた。で、もの言いぶりと人のいい顔色が、気も隔かせなければ、遠慮もさせなかった。

「丁ど午睡時、徒然で居ります。」

導かるるまま、折戸を入ると、そんなに広いと言うではないが、谷間の一軒家と言った形で、三方が高台の森、林に包まれた、ゆっくりした荒れた庭で、むこうに座敷の、縁が涼しく、油蟬の中に閑寂に見えた。私は一寸其処へ掛けて、会釈で済ますつもりだったが、古畳で暑くるしい、せめてのおもてなしと、竹のづんど切の花活を持って、庭へ出直すと台所の前あたり、井戸があつて、撥釣瓶の、釣瓶が、虚空へ飛んで猿のように撥ねて居た。傍に青芒が一叢生茂り、桔梗の早咲の花が二三輪、ただ初々しく咲いたのを、蒼と一枝、三筋ばかり青芒を取添えて、竹筒に挿して、のっしりとした腰つきで、井戸から撥釣瓶でざぶりと汲上げ、片手の水差に汲んで、桔梗に濯いで、胸はだかりに提げた処は、腹まで毛だらけだったが、床へ据えて、円い手で、枝ぶりを一寸撓めた形は、悠揚として、そして軽い手際で、きちんと極った。掛物も何も見えぬ。が、唯その桔梗の輪が紫の星の照らすように据ったのである。此の待遇のために、私は、縁を座敷へ進まなければならなかった。「粗茶を一つ献じましょう。何事も御覧の通りの侘住居で。……あの、茶道具を、これへな。」

と言うと、次の間の——崖の草のすぐ覗く——竹簀子の濡縁に、むこうむきに端居して……いま私の入った時、一度ていねいに、お時誼をしたまま、うしろ姿で、ちらりと赤い小さなもの、年紀ごろで視て勿論お手玉ではない、糠袋か何ぞせせと縫って居た。……島田鬚の艶々しい、きやしやな、色白な女が立って手伝って、肥大漢と二人して、やがて焔爐を縁側へ。……焚つけを入れて、炭を継いで、土瓶を掛けて、茶盆を並べて、それから、扇子ではたはたと焔爐の火口を煽ぎはじめた。

「あれに沢山ございます、あの、茂りました処に。」

「滝でも落ちそうな崖です——こんな町中に、あろうとは思われません。御閑静で実に結構です。霧が湧いたように見えますのは。」

「烏瓜でございます。下闇で暗がりでありますから、日中から、一杯咲きます。——あすこは、いくらでも、ごんごんごまがございますでな。貴方は何とかおっしゃいましたな、スズメの蠟燭。」

これよりして、私は、茶の煮える間と言うもの、およそ此の編に記した雀の可愛さを爰で話したのである。時

々微笑んでは振向いて聞く。娘か、若い妻か、或は妾か。世に美しい女の状に、一つはうかうか誘われて、気の発奮んだ事は言うまでもない。

さて幾度か、茶をかえた。

「これを御縁に。」

「勿論かさねまして、頃日に。——では、失礼。」

「ああ、しばらく。……これは、貴方、おめしものが。」

……心着くと、おめしものも気恥しい、浴衣だが、うしろの縫めが、しかも、したたか綻びて居たのである。「ここもとは茅屋でも、田舎道ではありませんじゃ。尻端折……飛んでもない。……ああ、あんた、一寸繕つておあげ申せ。」

「はい。」

すぐに美人が、手の針は、まつげにこぼれて、目に見えぬが、糸は優しく、皓齒にスツと含まれた。

「あなた……」

「ああ、これ、紅い糸で縫えるものかな。」

「あれ——おほほほ。」

私のがのっそりと突立った裾へ、女の背筋が絡つたように成つて、右に左に、肩を曲ると、居勝手が悪く、白い指がちらちら乱れる。

「恐縮です、何とも何うも。」

「恁う三人と言うもの附着いたのでは、第一私が此の肥体じゃ。お暑さが堪らんわい。衣服をお脱ぎなさつて。」

……ささ、それが早い。——御遠慮があつては成らぬ——が、お身に合いそうな着替はなしじゃ。……これは、一つ、亭主が素裸に相成りましたよう。それならばお心安い。」

きびらを剥いで、すっぱりと脱ぎ放した。畚褌の肥大裸体で、

「それ、貴方。……お脱ぎなすつて。」

と毛むくじゃらの大胡坐を掻く。

呆氣に取られて立すくむと、

「おお、これ、あんた、あんたも衣ものを脱ぎなさい。みな裸体じゃ。然うすればお客人の遠慮がのう成る。

……ははははは、それが何より。さ、脱ぎなさい脱ぎなさい。」

串戯にしてもと、私は吃驚して、言も出ぬのに、女はすぐに幅狭な帯を解いた。膝へ手繰ると、袖を両方へ引落して、雪を分けるように、するりと脱ぐ。……膚は蔽うたよりふつくりと肉を置いて、背筋をすんなりと、撫肩して、白い脇を乳が覗いた。それでも、脱ぎかけた浴衣を尚お膝に半ば挟んだのを、おっ、と這うと、あれ、と言う間に、亭主がずるずると引いて取った。

「はははは。」

と笑いながら。

既にして、朱鷺色の布一重である。

私も脱いだ。汗は垂々と落ちた。が、憚りながら禪は白い。一輪の桔梗の紫の影に映えて、女はうるおえる玉のようであった。

その手が糸を曳いて、針をあやつたのである。

縫えと、帯をしめると、私は胸を折るようにして、前のめりに木戸口へ駈出した。挨拶は済ましたが、咄嗟のその早さに、でっぷり漢と女は、衣を引掛ける間もなかったろう……あの裸体のまま、井戸の前を、青すすきに、白く摺れて、人の姿の怪しい蝶に似て、すっと出た。

その光景は、地獄か、極楽か、覚束ない。

「あなた……雀さんに、よろしく。」

と女が莞爾して言った。

坂を駈上って、ほんと呼吸を吐いた。が、しばらく茫然として佇んだ。——電車の音はあとさきに聞えながら、方角が分らなかった。直下の炎天に目さえくらむばかりだったのである。

時に——目の下の森につつまれた谷の中から、一セイして、高らかに笙の笛が雲の峯に響いた。

……話の中に、稽古の弟子も帰ったと言った。——あの主人は、笙を吹くのであるか。……然ういえば、余りと言えは見馴れない風俗だから、見た目をさえ疑うけれども、肥大漢は、はじめから、裸体に成ってまで、烏帽子のようなものをチョンと頭にのせて居た。

「奇人だ。」

「いや、……崖下のあの谷には、魔窟があると言う。……その種々の意味で。……何しろ十年ばかり前には、暴風雨に崖くずれがあつて、大分、人が死んだ処だから。」——

と或友たちは私に言つた。

炎暑、極熱のための疲労には、みめよき女房の面が赤馬の顔に見えたと言う、むかし武士の話がある。……霜が枝に咲くように、汗——が幻を描いたのかも知れない。が、何故か、私は、……実を言えば、雀の宿にもなわれたような思いがするのである。

かさねてと思う、日をかさねて一月にたらず、九月一日のあの大地震であつた。

「雀たちは……雀たちは……」

火を避けて野宿しつゝ、炎の中に飛ぶ炎の、小鳥の形を、真夜半かけて案じたが、家に帰ると、転げ落ちたまま底に水を残して、南天の根に、ひびも入らずに残った手水鉢のふちに、一羽、ちゃんと伝つて居て、顔を見て、チイと鳴いた。

後に、密と、谷の家を覗きに行つた。近づく胸は轟いた。が、ただ焼原であつた。

私は夢かとも思う。いや、雀の宿の気がする。……あの大漢のまる顔に、口許のちよぼんとしたのを思え。卯の毛で胡粉を刷いたような女の膚の、どこか、頤の下あたりに、黒いあざはなかったか、うつむいた島田髻の影のように——

おかしな事は、その時摘んで来たごんごんごまは、いつ何うしたか定かには覚ええないのに、秋雨の草に生えて、

塀を伝つたって居いたのである。

「何どうだい、雀すずめ。」

知らぬ顔かおして、何なんにも言いわないで、南天なんてん燭そくの葉はに日ひの当あたる、小庭こにわに、雀すずめはちよん、ちよんと遊あそんで居いる。

一家団欒

三月中旬の或る日曜日の午後、章は市営バスにのって町を出た。そして二時間ほどすると終点についたのでバスをおりて、広い田圃の向こうにひろがっている大きな湖をめざして歩いて行った。

生ぐさい臭気を発散する、一列のまばらな人家の裏手に沿った堀割をわたると、橋ぎわの低い盛り土のうえに「昭和新聞開拓記念」と深く彫りこまれた二メートルばかりの石碑が立っていた。しかしその後方にあるものはもはや田圃ではなかった。ただ碁盤目に仕切られた養鰻池が、薄れ陽の下に遠くひろがり、風がその上を吹きぬけていた。

浅く濁った水面を、時おり突風が強く叩き、そのたびに、叩かれた場所を起点として、細かい波の皺がでたらめの方角に奔ったりしていた。欠け歯のように水を干された池の、割れた底土には、烏の歩きまわった跡が無愛想に刻かれていて、岸辺ちかくに、空気補充用の小型の動力水車が、なかば錆びて、台座とともに露出していた。二、三羽の鳶が、啼きながら羽裏を見せて、章の頭のうえを舞っていた。

彼は、真中を貫いている砂利まじりの直線道路をほとんどん歩いて行った。すると、広い養鰻場の果てを、高い土手と、そのうえに生い茂っている一列の呆けた枯蘆が区切っていて、近づくと、風にもまれる蘆の向こう側から、石垣に寄せる湖の波の音が、不規則なざわめきとなって響いて来た。

それで彼は、「とうとう来たな」と心に思っ、土手を越えて、そのざわめきのなかへ下りて行った。

水面からの反射光とも、空からの光ともつかぬ、白っぽい光線が湖上に遍満していて、水だけはもう生ぬるい春の水になっていた。

章はそのなかを、遠い対岸めざして一直線に渡って行った。そうして、岸辺に到着すると、松林のなかを再びまっすぐに歩いて行った。腎臓も、眼球も、骨髓も、それから血液も、残して役にたっただけのものは、死んだときみな病院に置いて来たので、彼の身は軽かった。

やがて章は、かねて自分が目的としていた場所にたどりついた。それは、小さな寺の本堂のわきの軟かい毬を一面にならべたような美しい茶畑にかこまれた、あまり古くない彼の家の墓場であった。

「とうとう来た。とうとう来た」

と彼は思った。すると急に、安堵とも悲しみともつかぬ情が、彼の胸を潮のように満たした。彼は父が自分で「累代の墓」と書いて彫りつけた墓石に手をかけて、その下にもぐって行った。

四角いコンクリの空間のなかに、父を中心にして三人の姉兄が坐っていた。二人の弟妹は、かたわらの小さな蒲団に寝かされていた。

妹ケイ 明治四三年没 一歳

姉ナツ 大正二年没 一三歳

弟三郎 大正三年没 一歳

姉ハル 大正四年没 一八歳

兄秋雄 昭和一三年没 三六歳

父鎮吉 昭和一七年没 七〇歳

「章が来たによ」

と父が云った。入口ちかくに坐っていたハル姉が、すこしとび出たような大きな眼で彼を見あげて

「あれまあ、これが章ちゃんかやあ」

と叫んだ。柔らかな丸味のある懐かしい声が、彼の身体全体を押しつつむように響いた。五二年まえ一八歳で死んだ彼女は、髪を桃割れに結って木綿縞の着物を着、赤い花模様のメリンスの前掛けをしめた、少女のままの姿であった。

「わっちが死んだときは、章ちゃんはまだ小学校へはいったばかりだったで、わっちのことは、はあ忘れつら」
「覚えてる」

「わっちは、さっきお前があんまり父ちゃんとそっくりになって、頭が禿げているもんだで、解らないっけよう」
「何だか可笑しいよう」

「そうずらよ」

自分でも二、三年このかた、父の写真を見るたびに、満足をもってそう感じていた。

「僕も五九になったで」

章が少しびっこを引くようにして入って行くと父が

「章、どうしたえ。そこいらじゅう繃帯をして、交通事故にでもあったかえ」と云った。

「そうじゃあない。出がけに内臓をみんな向こうへ寄附してきたで、そのときの傷だよ——この眼玉もくり抜いて、本当の眼のかわりに綿をつめて、上へ義眼をかぶせてもらって来ただよ」

「それならええけえが。お前も相変らず思いきったことをするのう。むごいのう」

「ええよ。向こうで悪いことばかりして来たで、僕はこれくらい当り前だよ」

と答えたが、急に胸が迫ってきて

「父ちゃん、僕は父ちゃんに悪いことばかりして、悪かったやあ」

と云うと同時に涙がこみあげて、父の膝にしがみついた。

「ええに、ええに。お前はええ子だったけによ」

父が慰めるように云って、彼の首のつけねのところから頭に掛けて、ごわごわした厚い掌で撫でた。割れて角皮化したようなその左手の太い親指の先きには爪が生えていない。それは父が奮闘して家を起こした若い頃の勤労の名残りだ。父が死んだとき、汽車で数時間の勤先きから駆けもどった章は、その丸い指をくり返しじりばかりであった。この指には自分だけの強い思い出があった。

中学二年の夏休みの或る真夜中、章は誰かに肩をゆすられて眼をさました。父が枕元に坐っていた。

父は彼についてくるようにうながしてから、蚊帳をめくって二階へあがって行った。梯子段のある中の間の

食卓によりかかって、母が向こうむきに坐っていた。真つ暗な二階へあがると、父は黄色い電燈をつけ、違棚の上の袋戸棚から一通の封筒を出して、坐っている章の膝のうえに置いた。その顔はむしろ優しかった。

「お前の友達から来た。なかは見なくてもええによ」

と静かな声で云った。「アア」と彼は思った。頭が充血して脹れあがるような羞恥の念とともに、彼はそのAという同級生の、からかうような、意地の悪い眼色を胸に思い浮かべた。

校舎の片隅にもうけられた、番人のいない学用品売場から、彼は二度にわたって二、三冊のノートと一〇数本のペン先きを盗んだ。そして数日後の体操の時間、グラウンドの草取りをしているとき、彼のすぐわきにしがんで草をむしっていたAが、不意に

「こうやって、いらない草を抜くのを万引きって云うんだってさ」

と云った。笑いながら彼の顔をのぞきこんで、それから念を押すように

「な、みんな、そうだな。万引きだな」

とまわりの者に云った。満身に汗をかき、身体を固くして、しかし章は何気ないふう草をむしり続けていた。自分が今なにをしているのか、自分にもわからなかった。これから自分の身に起こるはずの、屈辱に満ちた出来事が、非常な速度で次々と彼の頭に浮かんでいた。

その日の夜、彼は盗品を風呂敷にくるんでこっそり外出し、暗い道端の叢に捨てた。Aの冷笑と、おびやかすような眼つきと、「万引き」という彼にだけ聞かせる囁きとは、しかし夏休みの始まるまでしつこく続けられていた。

「お前さえ改心してくれれば誰にも秘密をもらさない、と書いてあるによ」
と父が云った。

「うん」

しかし、そのかわりにAは今後いつまでも、多分卒業するまで俺を苦しめつづけるにちがいない、と彼は思った。父が

「わしがさつきダキ二天に、お前のことをあやまっておいたでな。ダキ二天は祟りも怖ろしいけえども、頼みもよく聴いてくれるだよ」

と云って立ちあがって、半開きになった戸袋のなかから手塩皿をとり下ろして、彼の小さな掌にのせた。父の白い絆創膏を巻いた薬指と、爪のない丸い親指の手から彼はそれをうけとった。

「これをお飲み。父ちゃんの血で汚くはないよ。お前は痛いからで切らんでもええによ」

浅い水の底に、薄赤味を帯びた粒々のようなものが沈んでいた。異様な厭悪と屈辱で、彼は黙ってしばらくそれを見ていた。そしてひと思いにその塩気を含んだ水を彼は飲んだ。

「それでええ——心配せずともええによ」と父が云った。

「ええに、ええに、ええ子だっけに」

いま父はそう云って、章の首筋を撫でた。

「それだけじゃあない。それだけじゃあない。まだ誰にも云えないことがある」

と章は心に思い、身体をもんで父の膝に頭をこすりつけた。すると、また新しく涙が溢れてきた。

中学を卒業して故郷へ帰ったとき、章は近くの古寺の一室を借りて受験勉強をしていた。怠惰で意志薄弱な彼を、性欲が執拗な力で悩まし続けていた。ある冬の夜、彼は家の納戸の隅から祖父の道中差しを盗みだして、本堂の裏手の墓地に出て行った。そして、墓地に接した料亭の二階から射してくる薄明かりのなかで、彼は自分の陰茎のなかほどに刃をあてて引いた。かなりの気後れがあつたにかかわらず、半ば錆びた刀は意外な切れ味で皮膚に深く食いこみ、彼が躊躇した次の瞬間に、その部分から血が吹き出すように流れてきた。

汚れた股引きとズボンを脱いだ半裸体の不様な格好で、章は夜半まで止まらぬ血をただ懸命に圧さえていた。その不安と狼狽とに動転した醜い自分の姿が、とり返しのつかぬ羞恥として、青年時代の彼を刺しつづけた。

傷痕に残された強い引つれで右に曲がってしまった醜い陰茎を、彼は一生持ちつづけてきた。――そしてすべての彼の生活が、そのような恥で貫かれてきた。

「はあええによ。何でもないによ」

と父が云った。

「何でもないことはない」

と彼は呟いたが、しかし気分はだんだんに柔いでくるようであった。すべては終わったのだ、と思った。彼が涙をふいているとハル姉が

「章の強情はまだなおらんかのう。昔っから父ちゃんに怒られると、二時間も暴れ泣きをして、うちじゅうを困らしたっけが」

と笑った。「二時間泣き」というのが、その時分の彼の仇名であった。

「のう、ナツちゃんも覚えてるら」

「わっちは早く死んだで、よく覚えがないやあ」

すこし茶がかった毛をお下げにむすび、型染めの太柄な袷に黄色い絞りの兵児帯をしめた一三歳のナツ姉が、懐かしそうに章を見ていた。

「僕はナツちゃんが生んだとき六つだ」

「それなら五四年も前のことじゃなか。お前のことなんで覚えていすか」

「僕は姉ちゃんのことをよく覚えてるのに」

章はますます気持ちがおぼろげ、甘えたような気分になってきた。

「僕は子供のとき、父ちゃんと兄さんと三人で、ハル姉さんやナツちゃんや、三郎やケイの骨を掘ったことがあ
る」

「ふんとうかえ。厭だやあ」

とハルとナツが顔を見あわせて恥ずかしそうな表情をした。奥の方に黙って坐っていた兄が

「ふんとうだよ。父ちゃんが掘って、僕と章が馬穴の水で洗っただよ」

「僕はあのと姉さんの間違えて骨壺に入れたかもしれん」

「章、ええ加減にしな。骨なんてどうでもええけえが、せっかく掘ってくれた父ちゃんに悪いじゃんか」

二人が叱ったが、父は黙って嬉しそうに頬笑んでいた。

三坪ばかりの墓地の三方を、何代か前からの土葬の低い墓石が、土からじかに立ってとりかこんでいた。三個の馬穴と数個の新しい骨壺を空地の中央にかためて置き、石塔を転がし、シャツ一枚の父がつるはしを振るって次々とその下を掘った。章と兄とは、見物に飽きると、まわりの茶畑の間を駆け歩いたり、生垣をくぐって外の田圃に出て唱歌をうたったりしていた。

広い枯田は、両側を人家や丘にかこまれたまま、先きへ行くに従ってせばまり、遠い彼方に消えていた。そのうえに青い山並が低く、陽にてらされて重なりあっていた。

古い骨は水になって土に溶けてしまっている、と父が云った。掘りあてたのは、××大姉、××童子、××童女と彫られた石の下から出た小さな四個の髑髏だけであった。

「これがおケイ」

「これが三郎」

「これがおハル」

というふう兄と章とに念を押しながら、父は掌で泥を落して馬穴のかたわらにならべて行った。

「ここは、その時コンクリ屋に頼んでこしらえた家だよ」

章が、兄に同意を求めるように云った。兄が黙ってうなずいた。

ナツ姉が死んだとき、兄は赤ん坊の三郎を背中にくくりつけて、大人しく枕元に坐っていた。三郎も翌年には死んで、いま部屋の隅に、その六年まえに生まれて七ヶ月で死んだケイとならんで、小さな蒲団ですやすやと

眠っている。兄は何時もやさしかった。自分自身は何でも我慢して、みんなを可愛がってくれた。そう思うと章の眼からまたしても涙が流れた。

「僕は兄さんにも悪いことばかりして、悪かったやあ」と云って彼は泣いた。

彼は、高等学校のとき、兄が自分の乏しい小遣をためてみな章にくれたことを、後悔の念をもって思い起した。彼は何時も、それをチップとして下らないカフェの女にやった。兄が結核にかかって大学をやめ、絶望的な療養生活に入っていたとき、彼は兄からあずかった顕微鏡を質にいれた。そして兄がやつの思いで父から貰うことのできた五〇円の写真機代を猫ばばして、二〇円の中古品を送り、余りをカフェ通いにつかってしまった。

「それ、また章の二時間泣きはじまったによ」

ハルが気を引き立てるように云った。

「お前も、はあ死んじゃったで、それでええじゃんか」

「死んでも消えない」

と彼は呟いた。しかし一方では「そうか、そうか」と思い、すこしは気が晴れるようでもあった。

「な、それでええにおしな」

とナツが云った。なるほど、これで本当にいいのかも知れない、と彼は思った。もう肉体がないのだから、自分には悪いことをしなくてもすむだろう。——それから世の中にたいする不平不満のようなものからも、そこから生ずる責任感みたいなものからも、それに対して自分が一指を加えることもできないという焦慮と無力感からも、そういうすべてのものから、自分は否応なしに解放された。それも相手の方から解除してくれたのだ。

——ああ何てこころは暖かいだろう、と彼は溜息をつくように思った。これからは、もう父や兄や姉の云うことを何でもよく聞いて、素直に、永久にここで暮らせばいいのだ。

「すこし寝たらどうだえ。遠いところを歩いて来て、さぞくたぶれつら」

父がなぐさめるように云った。

「わし等は、これからヒヨンドリを見物に行ってくるで、そのあいだゆっくり休むとええによ」
ハルが跳びあがって

「あ、そう、そう、章が来た騒ぎですっかり忘れていた。ナツ、ぐずぐずせんと早く行かず」と叫んだ。

「着物も替えずに行くのは、わっちら恥しいやあ」

「ええよ、ええよ。どうせわっちらの姿は人にやあ見えないだでええじゃんか」

「それもそうだのう」

「俺も行く」

と章は云って立ちあがった。

「しかしいま行っても早すぎるら」

ヒヨンドリがはじまるのは真夜中にきまっていた。

「この頃は八時から一二時までになっただよ」

と兄が云った。章は、それはきつと子供の教育に差支えるという、教師やPTAの入れ知恵にちがいないと思つた。

彼等は一団となつて、真暗な外に出て田圃のなかを一直線にどんどん歩いて行つた。

山と山とが浅く入り合いになった窪みの山裾に小さな神社がある。そして行くての闇のなかを、神社にむかつて赤い松明の火が渡って行くのが見えた瞬間、章の胸に、幼かったころのわくわくするようなときめきが蘇つた。――あの火が、章の背丈ほどの廻り縁をもった小さなお堂に着くと、扉の前で、腹に太いメ縄を巻いた裸の青年たちに押し戻される。揉みあいのはじまり、闇のなかで松明が揺れて弾ぜ、参拝者のどよめきの上に熱い火の粉がふりかかる。

そしていつときの喧騒が静まると、やがてお堂に灯がともされ、板敷きに敷かれた二坪ほどのせまい席のうえ

で、単調な太鼓と笛と鉦のゆるい響きにつれて、田踊りに似た、多分「火踊り」の訛りにちがいないヒヨンドリがはじまる。それは、踊りとは云っても、すべて一回が五分か七分で終わってしまう、ぶつ切りの四方拝のような、また何かの卑猥な仕種を形どったような、ただのゆるい身動きの連続にすぎないものであったが、しかしそういう正体のよく知れぬものが、いつも幼い章の中にひそむ何かを目覚ましつづけて行ったのである。

章は、兄と姉のあいだにはさまれて、どんどん近づいて行った。「デンデコ、デコデコ。デンデコ、デコデコ」単調で濁った太鼓の音が響いていた。あいまに、調子はずれの笛が「ピー」と鳴り、それにつれて鉦が「カーン、カーン」と鳴っていた。

黒木綿のたつつけをはき、頭に薄い紙でこしらえた平たい帽子のようなものをかぶり、その両側から細い紙のひらひらの飾りをトックリセーターの肩まで垂らした青年が、片手に壊れかけた鈴、片手に半開きの白扇を持って立っていた。彼は太鼓や笛の音とは何の関係もないように、四方に向かって同じような動作でお辞儀をし、それから汚れた白足袋に藁草履をはいた足を不器用に動かして廻り歩き、また立ちどまって四方に向かってピンピョンと跳ねてみせた。

「わにや、わにや」というような、静かなざわめきをともなった空気の振動が、章の皮膚に伝わってきた。それは踊り手のまわりをとり囲んでいる村の人間たちのかもし出すものらしかった。もう死人となってしまうた章の眼に、彼等はいくらでもないものであった。紙の帽子をかぶった踊子だけが判然と見えるのであった。深い安堵の思いが、再び彼の胸をひたした。

「デンデコ、デンデコ」

緑の手甲をはめ、白い紙の花帽子をかぶり、剥げた姥の面をつけた青年が、壊れかけた鈴と半開きの白扇を持って、四方にお辞儀をし、それからまたピン、ピンと跳ねはじめた。黄色い縞の着物の腹の部分を妊婦のよう膨らませ、そのうえに古ぼけたメリンスの赤い前掛けをしめ、合間に腹を撫で、それからまた仰向くような仕種をくりかえしていた。肩から脇に太い藁束をまいて、柴の束を手を持った青年が、股を高くはねあげてそのまわりをまわり、あいまに滑稽な身振りで相手の腹にさわった。

「厭だよう、わっちら」

とハルが云った。

ああ、これだ、と彼は思った。これが俺の後悔と不幸のはじまりだったのだ。こういう無邪気で単純なものが、いったん俺の身体の中に入りこむと、羞恥と罪に満ちた陰気で汚い塊に変化してしまったのだ。濁った池の水面と底との中間にブヨブヨと固まって浮いている原油のように、いつも揺れて、そのくせ沈殿もせず浮きあがりもせず、一生のあいだ俺を刺激しつづけ、苦しめつづけて来た。

こまかい雨が振りだしていた。章の立っている堂のまわり縁の外側に、黄色い小粒の花を、細枝いっぱいにつけた数本の連翹の木が、重そうに頭を傾けてならんでいた。花のひとつひとつが霧雨にまぶされたまま、裏側から射す祭提燈の淡い逆光にうつし出されて輝いて見えた。

もういい。もう済んでしまった、と章は思った。父がふりかえって

「章、甘酒を飲みに行かずよ」

と云った。

「お前もはあくたぶれつら」

彼等は堂の下に降り、御手洗の前にならべて置かれた二個の大きな馬穴のなかから、奉納の甘酒をブリキの杓でくみだして、替わる替わる飲んだ。翹の香に満ちた熱い甘酒が、章のガラシ洞の内臓をどろどろと下って行った。

「くたぶれつら」

と兄が行った。

「うん」

と章はうなずいた。

そして彼等はまた一団となって、背中にヒョンドリの太鼓の音を聞きながら、墓場にむかって帰って行った。「デコデコ、デコデコ。デコデコ、デコデコ。」

みちづれ

白菊、一本、二百六十円。少々高いような気もするが、これが最後だから、いつも通りに十本買って、花束だとわからぬように紙ですっぽり包んで貰う。

「これから墓参りかね？」

と駅前マーケットの花屋はいう。

強い津軽訛りが懐かしい。花を買っても、もはや誰も粋なたくらみだと思ってくれないのは情けないが、花屋の見当はあながち外れているわけでもないから、

「まあ、そんなところだ。」

「命日ならしうがないけど、難儀なこったね、こんな天気で。」

外は横殴りの雪である。店の前を囲んでいる透明なビニールシートが、通路を吹き抜ける風を孕んでぱりぱりと音を立てている。

毎年のように、この店にきて、おなじ花をおなじように包んで貰うのだが、花屋の方にはまるで憶えがないらしい。年にいちどの客では無理もないが、花をすっぽり包ませたのも、ただ、あいにくの風雪から守るためだと思っているようである。

一見、なんでもなさそうな紙筒になった花と引き換えに、千円札を三枚渡すと、

「はい、どちらも菊が十本。おまけして、二千と五百円ずつ、いただきね。」

と花屋は店の奥の暗がりへ声をかけた。

そのとき、彼は、奥の石油ストーブのそばに、自分のとそっくりな紙筒を小脇に抱えた先客がいるのに、初めて気づいた。黄土色の外套を着た、品のいい顔立ちの小柄な老婦人で、黒いブーツに炎の色が映っていた。

女房からおつりを貰って、花屋を出る。また、どうぞ、という声を背中から聞いたが、もう、くることもない。次の連絡船は午後三時の出航で、まだ一時間ほど間があった。街にはべつに用がないから、そのまま駅へ戻

って、待合室の隅の軽食スタンドで一と息入れる。雪に濡れた頬をぬぐい、冷えた歯に滲みるコーヒをちびちびと飲む。靴のなかに雪水が染み込んだのか、爪先が痛い。手袋をはめていた手も、指先の方がかじかんでいる。ふなべりの寒さが思いやられる。

北の玄関と呼ばれる駅の構内は、着ぶくれた人々で混雑していた。スタンドの彼の椅子からは、囲いのガラス越しに改札口の雑踏が見えた。この駅では、鉄道の客も、船の客もおなじ改札口を出入りしている。列車が発着するプラットホームの一本がやけに長く伸びていて、その果てが連絡船の棧橋になっているからである。コーヒーカップのほとぼりで手を暖めながら、見るともなしに眺めていると、さつき花屋で一緒だった老婦人が、銀髪に焦茶色の帽子をのせて改札口を通るのが目に入った。小振りなバッグを一つ提げ、例の紙筒は片手で胸に抱えている。街へ用足しに出てきたついでに、亡夫へ手向ける花を買って帰るのだろうか、と彼は思い、帽子を目深にしてとぼとぼと郊外の家路を辿る姿を想像した。

しばらくして、彼も途中下車した切符を見せて改札口を通った。切符は、東京から海峡のむこうの港町まで、一枚でとおしになっている。

棧橋への通路を兼ねている長いプラットホームは、屋根があるにも拘らず、すっかり雪道になっていた。わずかにコンクリートの地肌が覗いているのは、跨線橋の降り口のあたりと、売店や立ち食い蕎麦屋の前ばかりで、あとは、屋根裏の塗料のせい一面に薄く黄ばんで見える雪道である。そこを、海の方から雪が真横に吹き抜けている。

彼は、その雪道のなかほどまできてから、首をすくめて前をゆくまばらな人影のなかに意外な後姿を見つけて、おやと思った。てっきり各駅停車の列車に乗って近郊へ帰るものとはかき思っていたあの老婦人が、焦茶色の帽子を雪のくる方へ傾けてのろのろと歩いている。ゆく手には、もはや連絡船の乗り場しかない。すると、おなじ船に乗るつもりなのだ、おなじ花の紙筒を抱えて——彼はそう思っ、妙な気がした。

ここからあまり遠くない土地で育った彼は、雪道の歩き方を心得ている。危なっかしい足取りの人々を抜いて、ほどなく老婦人に追いついたが、なんととはなしに前へ出るのを躊躇っているうちに、目の前の焦茶色が、不

意に沈んだ。まるで何者かにいきなり両足を払われたかのような転び方で、あ、と思ったときには、もう、雪の上で寝そべる形に倒れていた。彼は思わず駆け寄った。

「大丈夫ですか。」

「びっくり……とうとう転んじゃったわ。」

老婦人は、思いのほか明るい、張りのある声でそういうしながら身を起こすと、肩越しに彼を仰いだ。が、ふと怪訝そうな顔つきになって、確かめるように彼を抱えている紙筒へ目を移した。

「手を貸しましょうか。」

「いえ、結構。ひとりで立てます。」

きっぱりとそういったが、すぐには立てなかった。ブーツのかかところが凍てついた雪を蹴っては滑るばかりである。見かねて、手を伸ばすと、

「ほんとうにお構いなく。放つといってください。」

老婦人はちよつと身をもがくようにした。すると、その肘が、彼の手のひらを突いた。ほんの一瞬のことだが、同情や手助けのたぐいは一切拒否しようという頑な意志を伝える手応えがあった。

彼は、ちいさな吐息を洩らすと、また歩き出した。

広い連絡船の待合室には、立ち食い蕎麦の出し汁の匂いが籠っていた。色とりどりの椅子席は相変らず閑散としていて、棧橋や港の見える窓際だけがわずかに賑わっていた。身軽な防寒服の男たちが十数人もずらりと並んで、手に手に重そうなカメラを構えている。背後から覗いてみると、着いたばかりの連絡船がタグボートに押されながら向きを変えるところで、窓の正面に船首がくるとシャッターの音が高まった。

この連絡船の航路は、あと一と月足らずで廃止されることになっている。海峡の下をくぐり抜けるトンネルが完成したからである。廃止の日が迫るにつれて、名残りを惜しむ客たちで船も港も混雑するだろうと思いいまのうちに乗り納めをしようと早目に出かけてきたのだが、意外にも、いつもと様子が違うのはこの窓際だけで

あつた。

彼は、その窓とは反対側の奥までいって、隅っこには、かつて脚の長い、緑色の羅紗張りが手許へゆるく傾いている書き物机が置いてあり、もう何十年も前の話だが、彼の肉親のひとりがそこでこの世に別れを告げる手紙を書いたのであつた。その肉親は、手紙を投函してから船に乗り、海峡のまんなかあたりで身を投げた。遺体は遂に揚がらなかった。

だから、彼は、この海峡こそ肉親の墓場だと思い、郷里を遠く離れて、時間と費用をどうにかやりくりできるようにしてから、命日の前後に、花を携えて墓参りに出かけてくるのを年中行事の一つにしていた。墓参りといつても、海峡のまんなかあたりで連絡船のふなべりから花を落し、肉親の霊としばらく対話を試みてから、海峡のむこうの港町に一泊して、翌朝の飛行機で引き返すだけだが、肝腎の連絡船がなくなるのでは、そんな自分だけのささやかなならわしもこれが最後ということになる。

荷物を椅子に残して、やがて取り毀されることになるかもしれない待合室のなかをぶらぶら歩く。いつの間にか、胸に拵いの造花をつけた団体客が売店のまわりにひしめいている。隙間を探して覗いてみたが、記念に欲しくなるようなものが見当たらないから、子供たちへの土産に、航行中の連絡船を空から写したテレフォンカードを三枚買って、人ごみを離れる。

入口を入ってすぐ左手にある婦人待合室の前を通ると、ドアを開け放した戸口から、床より一段高くなっている絨緞敷きの奥の太い角柱の蔭に、焦茶色の帽子を脱いだ老婦人がひとりぼつんと坐っているのが見えた。賑やかに談笑する車座のグループにまるくした背中を向けて、うつむき加減に、ひっそりと正坐している。

彼は、通り過ぎてから、ふと、誰かに似ていると思ひ、すぐに自分の死んだ母親を思い出した。顔や身なりは似ても似つかないが、やはり小柄だった母親も、生前、よく炉端に背中をまるめて、しんと正坐していたものであつた。そんな、ひとりでなにかにじつと耐えているような恰好が、母親に似ていた。

それから、彼は思わず、立ち止まりそうになった。この海峡で命を捨てた人は、ほかにも大勢いる。自分以外にもこっそり最後の慰霊にやってくる肉親がいても、すこしもおかしくはないのである。

定刻に出帆の銅鑼が鳴る。それに太い汽笛と、蜋の光。それらを船室の座席で忘れぬように耳をそばだてて聴く。老婦人は通路を隔てた窓際にいて、吹雪がはためく海に見入ったまま動かない。

海峡のむこうの港まで四時間足らずの航海である。はじめの一時分余りは湾の内、それから外海へ出て、潮流の急な海峡にさしかかるのは出港してからおよそ二時間後と思えばいい。船腹を叩く波音が高まり、船がひっきりなしに胴震いして軋むようになれば、そろそろ海峡のなかほどである。

先に席を立ったのは老婦人の方であった。紙筒を目立たぬように腋の下から縦にして、そっと船室を出ていった。それが濡れた窓ガラスに映るのを見て、彼は浮かしかけていた腰を落ち着けた。外はもうすっかり闇で、風は相変わらず強そうだが、さいわい雪は小降りになっている。

老婦人はなかなか戻ってこない。さつさと用を済ませて、船内の暖かいレストランでお茶でも飲んでいるのだろうか。痺れを切らして、寒さ凌ぎの身支度にかかると、隣の中年男が目醒まして、もう海峡を渡り切ったのかと驚いたように窓をこすった。

照明を落したデッキは無人で、刺すような風ばかりが吹き抜けていた。濡れた歩廊のところどころが窓から洩れる明りで氷の飛び石のように光っていた。そこをよろけながら船尾へ回る。船尾から細くて急な階段をもう一つ昇ると、最上階の狭いデッキで、巨大な煙突のすぐそばに、彼のいつものふなべりがある。

その最後の階段を昇りかけると、思いがけなく、上から降りようとして躊躇っている人のブーツが鈍く光って見えた。彼は後戻りして、下から、どうぞ、と声をかけた。

ブーツがゆっくり、一段々踏み締めながら降りてくる。ベルトのついた黄土色の外套。銀髪が風に吹き乱れている。老婦人は手ぶらになっていて、その顔には重荷を下ろした人の安らぎが見えた。彼がそこに立っているのを見ても、驚かなかった。

「おさきに……。」

老婦人のまなざしには、みちづれを見るような親しみが感じられた。彼は、無言で会釈してすれ違ふと、老婦人がふらふらと船室への入口に辿りつくのを見届けてから、階段の昇り口にもたれて花の包み紙をむいた。

じねんじよ

もしかしたら、どこか内臓をわずらっているのかもしれない。それとも、血圧の具合でも思わしくないののだろうか。なにしろ、さかんなころには、この地の花街の売れっ妓に子を産ましたほどの道楽者だから、いまでも相当な飲み手に違いなからうと思われるのに、問い合わせしてみると、案に相違して、会うなら白昼、しかも場所は街なかのフルーツ・パーラーがよろしかろうということである。いずれ昔馴染の待合か、そうでなければ花街の路地の奥にある気の利いた小料理屋の二階あたりで落ち合って、宵の口からしんみりと御対面——というつもりでいたのが、すっかり当てが外れてしまった。

街のフルーツ・パーラーなら、もう二十年も前のことになる半玉のころに、朋輩たちと誘い合わせて稽古帰りによく寄ってお喋りにふけたものだが、まさか四十近くになったいまごろ、あんな明るい賑やかな店に初対面の父親と向い合ってストローをくわえることになるとは思わなかった。

冬が間近だとは思えぬような小春日和で、踊りの稽古着にしている母親ゆずりの山繭紬では歩いているうちに汗ばみそうだったが、母親によれば、この紬は先年あのひとが信州旅行で気に入って土産に買ってきてくれたものだから、いい目印になるはずだという。あのひと、とは、これからフルーツ・パーラーへ会いに行く実の父親のことである。

「着物にはうるさいひとだったからね。あのひとが惚けていなければの話だけどさ。」

母親は長火鉢のふちを人差指の腹で意味もなくこすりながら、そんなことをいう。もう七十なのに、頬骨のいただきにうっすら赤味がさしている。

なにをするにも和服ばかりで、ろくな洋服の持ち合わせがないし、体も和服に馴染んでしまっていて、もはや洋装にはすっかり自信を失っている。仕方なく、蛙の子は蛙と諦めて、クリーム色の地に茶と紺の縞模様の山繭紬に薄茶の帯をきつ目に締めた。

台所の天窓からさし込む日ざしが強い。小桃は、冷蔵庫を開けて、

「小娘じゃあるまいしさ。フルーツ・パーラーへ死んだと思つていた父ちゃんに会いにいくなんて……。」
と小声で愚痴をこぼしながら、氷のかけらを一つ口のなかへ放り込んだ。隅の方で冷えている大吟醸の清酒がちよつとうらめしかった。

もう長いこと、父親の名は亀之助で、自分がまだほんの幼児のころに病死したのだと思ひ込んでいたのは、母親にそう教えられていたからである。実際、家の仏壇には、頭を角刈りにして黒っぽい和服を堅苦しく着た初老の男のちいさな写真が飾ってあって、母親はそれを死んだ父親の遺影だと教えた。寺にある墓石は、古い上に随分もうい石質だと見えて、側面に刻まれている小文字の大半は苔と磨滅で判読もむづかしいが、亀之助という名だけははっきりと読める。

小桃は、仏壇の写真を覗き見ては、子供心にも、父親にしてはちと齢をとりすぎているような気がしたものだが、男というものは、時として相当な齢になつてからでもまだ父親になれるものであるらしい。母親は、自分が小桃を産んだとき父親はちょうど還暦だったといつていた。

ところが、この秋口に、思わぬことから自分が長年母親に騙されていたのに小桃は気づいた。自分の実の父親は、亀之助ではなくて松蔵で、その松蔵という人物はおそらくいまでもこの世のどこかに生きているのである。

そんなことがどうしてわかったのかというと、旅券の取得に必要な戸籍抄本を市役所へ貰いに行って、帰りに中庭のベンチで隅々まで読んでしまったからである。急に旅券など用意することになったのは、時々大尽遊びをしにくる東京の不動産屋が地価の高騰に乗じて一儲けしたと見えて、小桃をはじめ馴染の妓を三人、香港へ連れてってやろうといひ出したからだ。

小桃は海外旅行など初めてで、帰ると声を弾ませて母親に話した。さっそく旅券というものを用意せねばならぬことも話した。けれども、戸籍抄本のことは、それが旅券を取るために必要だとも知らなかったから、話さなかった。母親の方も知る由がない。

市役所へは、清元の稽古の帰りに茶々と二人でいった。見ていると、おかしなもので、戸籍係から謄本や抄

本を受け取った人々は、ほとんど例外なく、担任の教師から通知表を貰った小学生のように、なんとなく不安そうな顔つきで背中をまるめ、細目に開けて中身をちらと覗き見てから、そそくさと立ち去っていく。

茶々の方が先に名を呼ばれた。内田友恵さん、と本名を呼ばれて、茶々は一瞬きよんとしていたが、すぐに、あ、あたし、といって椅子から立っていった。抄本は便箋ぐらいの大きさの一枚の紙であった。茶々は、なにかの免状でも貰ったかのように浮き浮きと、受け取った抄本を親指と人差し指の先でつまんでひらひらさせながら戻ってきたが、その抄本の片面には思いがけないほど多くの文字がぎっしりと書き込まれているのが、小桃にも見えた。茶々が生まれながらにして引きずっている目に見えない厄介事が文字に化けて列をなしているように見えた。

茶々もそれに気づいて、真顔になると、立ったまま背中をまるめてほんのすこしだけ読んだ。それから、抄本を握り潰すようにまるめると、眉間に皺を拵えて、

「悪いけど、今日はおらをひとりで帰らせてな。なにかしらん、急に気分が悪くなった。んだら、お先にな。」
と、逃げるように小走りに帰っていった。

それを、なんとなく気の毒な思いで見送っていると、小桃もやはり本名で、酒井時子さん、と呼ばれた。小桃は、自分の戸籍抄本を見るのは初めてだったが、一目で、父親の名を書き入れる欄が空白になっているのに、まず気がついた。隣の母という欄には、酒井きんとはっきり母親の名が書き入れてある。だから、父という欄には亀之助となければならないのだが、なにもない。空白のままである。

小桃は、中庭へ出て日陰のベンチに腰を下ろした。野の間に並んでいるこまごまとした毛筆の文字の数は、茶々のに比べて格段にすくなかったが、落ち着いて読んでみると、茶々を気の毒がってばかりもいられないことがわかった。

第一行目には、生年月日や出生地の所番地を母親が届け出たという記述があり、次の行には、それから十日ほどして父小野松蔵が認知の届け出をしたという記述があった。父小野松蔵が突然出てきたので小桃はびっくりして目を睜り、その第二行目を何度も繰り返し読んだ。

その晩、小桃は母親に白状させた。手間は掛からなかった。

「お母ちゃん、いったい、どういふ魂胆？」

と流し目に見て、前に戸籍抄本をひろげて見せるだけでよかった。

母親によれば、亀之助というのは母親自身の父親で、小桃を産ませたのは抄本に記載されている通り小野松蔵だが、その後、その松蔵と縁が切れたこともあり、ゆくゆくは置屋を継がすつものの娘には男親などかえつて邪魔になるばかりだと思つて、死んだと教えていたのだということであつた。

「じゃ、いまでも健在なのね、父ちゃん。」

「健在かどうかはともかく、死んだちゆう噂は聞かぬすけにな。はや八十は越したろう。」

母親は、相手の居所や消息を知っているのだろうか、昔気質にそんな素振りはずこしも見せなかつた。

「会わせてな、いちど。」

「いまさら会つて、どうするつてな。」

「会つてどうするといふこともないけれど、父娘がお互いに生きとるのに顔も知らずにいるといふのも氣掛かりなこつたえ。こつそり連絡とつて、会わせてな。」

「癖になつたりすれば、先様に迷惑じゃからのう。」

「癖になるような年頃、とうに過ぎたせ。」

「んだら、一遍こつきりよ。」

「約束する。これがおらの父ちゃんかとおつづく顔を見れば氣が済むの。」

それでは街のフルーツ・パーラーで、短時間なら、と返事がきたのは、香港旅行から帰つて間もなくであつた。母親は曖昧な思ひ出話をするばかりで、初めて落ち合う相手の特徴をいつこうに教えてくれなかつた。確実なのは、相手が八十過ぎの老人で、中肉中背で、以前から街へ出るときは灰色のソフト帽で髪を薄く頭を隠すのがならわしだつたといふことだけである。小桃は、せめてそのソフト帽を目印にすることに、約束の間より早目に着くように家を出た。相手が先に着いてソフト帽を脱いでしまえば唯一の目印がなくなつてしま

うのだ。

繁華街の角にある広いフルーツ・パーラーで、日和のせい、ウィークデーの午後だというのに店内は予想以上に立て込んでいた。ほとんどが女の客だったが、なかに二人だけ男の老人が混じっていて、一人は連れ合いらしい老婦人と並んでアイスクリームを舐めていた。もう一人は近在から出てきた人らしく、手編の厚ぼったいジャケツの上に早くもチョッキを重ね着した状態で、時々虫眼鏡を用いながらのんびり新聞を読んでいる。

小桃は運よく入口の近くに空席を見つけて、そこから一枚ガラスのドアを押して入ってくる人々を注視していた。いまはもはや灰色ではないかもしれぬが、ともかくもソフト帽をちよいと斜めに傾けて、首には渋い水玉模様かなんそのアスコット・タイを形よく巻いた瀟洒な老人だったら、どうだろう。小桃は、珍しく胸がときめいてきた。

——不意に、うしろから肩を軽く叩く者がいた。小桃は振り返った。思いがけないことに、奥で新聞を読んでいたジャケツの老人がいつの間にか背後に立っていて、眩しように目をしばたたきながらもっと思いがけないことを口にした。

「お前さん。時子だえ？その紬を着ているところはおふくろの若いころにそっくりだ。ま、あっちのテーブルさ来いちゃ。」

小桃はちょっとした間、呆気にとられて老人の赤い鼻を見詰めていた。それから、弾かれたように椅子から立ち上がって奥へ引き返す老人に従った。自分は確かに時子であり、自分を時子と呼ぶ老人は自分の父親しかいないのである。

「せば……」と小桃は、奥のテーブルに向い合ってから老人の日焼けした皺深い顔から目を離せずに行った。

「あんたさんは、小野松蔵さんで？」

「んだ。」と老人は頷いた。

「おいたあ」と小桃は驚き呆れる小声を洩らした。「ほんに、松蔵さんで？」

「んだ。ほんにせ。」

老人は人の好きそうな笑顔を顔に浮かべ、小桃も釣られて笑顔になった。畳んだ新聞の上に、形が崩れてリボンも色褪せた褐色のソフト帽がのっている。小桃は、父親が気取った老紳士でなくて、かえってほっとしていた。

「お前は、なんにする？」

ウエイトレスに手を上げて父親がいった。

「父ちゃんは？」

小桃は思わずそういって、うろたえた。いい齡をして、忽ち涙ぐんだからである。

「我だらクリーム・ソーダせ。」

「んだら、おらもクリーム・ソーダ。」

と四十女が椅子に体を弾ませていった。

二人は緑色の甘いソーダ水をストローで飲んだ。父親が物柔らかな口調でいった。

「怨みでもあらは、なんでも喋れや。」

小桃は急いでかぶりを振った。なにも怨みを訴えにきたのではない。けれども、それ以外の言葉もなに一つ口から出てこなかった。二人はただ、どちらも無言のままたつぷり時間をかけて一杯のクリーム・ソーダを飲んだだけであった。

別れるとき、父親はテーブルの下から、握りが太くて先細りになっている、ねじれたステッキのようなものを取り出した。全体が油紙に包まれていて、麻紐で螺旋状にしばってある。

「これはな、じねんじよだけんど。」

と父親はいった。

「じねんじよ？」

「山の芋よ。今朝、おらが早起きして、自分で山から掘ってきた。これを土産に持って帰ってけれ。お前のおふくろはこのじねんじよが好物でな。精がつくから、これで売れっ妓のころを凌いだものよ。ま、二人で麦とろに

でもして食くってけれ。」

フルーツ・パーラーを出でると、二人は潔ふたりいさぎよく右みぎと左ひだりに別わかれたが、まだ何歩なんぽも歩あるかぬうちに、小桃こももは父親ちちおやに呼よび止とめられた。

「そうステッキみたいに持もって歩あるいちゃ、なんね。じねんじよの命いのちは根ねっこの先さきにああってな。途とちゅう中で折おらずに、根ねっこの先さきまでそっくり掘ほり出だすのが礼儀れいぎなのせ。ステッキみたいにして持もち歩あるいたら、いつかはうっかり根ねっこの先さきを傷きずつける。横抱よこだきにしてややってけれ。」

父親ちちおやは笑わらってそういうと、形かたちの崩くずれたソフト帽ぼうを驚おどろかすににして、頭あたまからちよちよっと持もち上あげた。

近代日本における「愛」の虚偽

キリスト教系の文化を持つ国においての人間と人間との触れ合いの道徳的な整理の仕方には、ほぼ定型となつてゐる共通の型がある。各民族の習慣や宗派等で違ふが、我々がヨーロッパ的道徳と一括して考へてゐるものであり、キリスト教の人間認識に基いてゐる。他者を自己と同様の欲求を持つものとして考へて愛せ、という意味のその黄金律から来ているように思う。「人にかくせられんと思ふことを人に為せ」というような言葉でそれは『バイブル』の中で表現されている。その考へ方は、他人を自己と同様のものと考えたという意味で個人尊重の考へ方を生み、更にそのような独立した他者に、愛という形で働きかける組み合わせ、交際、協力などを尊重する考へ方を生み、市民社会というものを形成する原則の一つをなしている。それは儒教の仁という考へ方と似てゐる。また仏教の慈悲という考へ方とも似てゐる。そういう他者への愛や憐れみというようなものなしに社会というものの、人と人との秩序ある組み合わせというものは成立しないから、人間と人間のあいだの秩序が考へられる所にはきつと、他者への愛や他者の認識があることとなる。しかし、西洋と東洋の考へ方には、かすかな違いがあり、やがてその違いが文化の総和においての大きな違いとなつてゐるらしい。

この西洋と東洋とにおける他者と自己の関連の考へ方の違いについて、その本質を学問的に決定することは私などの任ではない。しかし私は日本人として西洋の文学や思想に慣れ親しんだので、その違いを考へる機会を多く持った。私は漠然と、西洋の考へ方では、他者との組み合わせの關係が安定した時に心の平安を見出す傾向が強いこと、東洋の考へ方では、他者との全き平等の結びつきについて何かの踏みが残されてゐることを、その差異として感じている。我々日本人は特に、他者に害を及ぼさない状態をもつて、心の平安を得る形と考へてゐるようである。「仁」とか「慈悲」という考へ方には、他者を自己のように愛するというよりは、他者を自己と全く同じには愛し得ないが故に、憐れみの氣持をもつて他者をいたわり、他者に対して本来自己が抱く冷酷さを緩和する、という傾向が漂つてゐる。だから私は、孔子の「己の欲せざる所を人に施すことなかれ」という言葉を、他者に対する東洋人の最も賢い触れ方であるように感ずる。他者を自己のように愛することはできない。

我らの為し得る最善のことは、他者に対する冷酷さを抑制することである、と。

慈悲という仏教系の考え方は、もっと強い、もっと積極的なものだろう。他者は愛さなければならぬ。しかしそれは憐れみや同情という形となり、そこには、優れたものが劣れるものと接触する時には、という条件がつけられているように思う。もし、神とか仏という絶対者を想定して、現世のマイナスが来世において、または神の支配する理想社会において償われる、という確信を予定するのでなければ、我々は絶対に他者を自己と同様に愛することはできないし、また自己を殺してまで他者を憐れむこともできない。「死」について語ることを拒否し、「現世」の秩序をのみ考えた孔子の立場では、自己と他者との関係を、「仁」という寛容な言葉で規定し、自分の望まないことを他人に押しつけるな、という最低法則を設けたことは当然であったと思う。そこには、現世において、利己心を核として生きている人間の関係に基礎を置くところの、消極的な他者との結びつきの安定した形が設けられている。しかしそこから、どんな秩序を求めることができるだろうか。「礼」というような節度によって、上下の秩序の安定を予定することしかできず、利己的な人間と人間との間の冷酷な区別感の消滅する希望は極めて薄いように思う。孔子はリアリストである。

この冷酷な人間の区別感を消そうとする不可能なことを願うことは、絶対者の存在を待ち望むこととなり、もしこの願いが強ければ、そこに神のイメージが次第に現われはじめるように私には思われる。絶対者を設定して、他者への愛の関係を命令するときに、「他者を自己と同じく愛せ」という強制が生れ、不可能なことが命令によって実在性を帯びて来る。このような善の強制の考え方は、キリスト教と、それから派生した回教と、またやっぱりキリスト教的な思考型に基づくマルクシズムにも含まれているように思う。マルクシズムは、道徳的強制を質的に持っている限り、絶対者的存在を常にトップにおかなければならない。

そのような、人間の為し得ないことを命令として強制するとき、人はその方向への努力と希望を持つだけで、常にそこから離れ落ち、不完全なもの、教えを守り得ないものとして脱落する。トマス・アキナスはそのことを、我々は善の方向への努力を繰り返すが常にそこから落ちる。しかし、それらもろもろの善行の指差す方向に神が実在する、と言った。指向、祈祷、願望による行為そのものに神の存在があるので、善悪の規定や教理など

にあるのではないことを、この言葉は実に巧みに示している。神の存在を可能にし、愛による人間の救いを可能にするのは、その善から脱落した時もおその善への指向を抱きつづけることであり、そこに懺悔とか祈りという転換行為の設定によって、常住に立ち直りの機会が信者のために設けられている。悔い改めること、善の理想への同体化を願うことは、命令が不可能であるという前提において存在して、不可能であるが故に無限に繰り返される行為を呼び起す。

悔い改めと祈りに信仰の本質があり、人間としては不可能なことを前提としているキリスト教的な愛の考え方、それと関連している男女の愛の考え方、カトリック的に言えば、重婚、離婚を許容しない考え方、またその変形としてのプロテスタント系の恋愛と結婚についての解釈が存在している。キリストの教える、相手を自己と同じように考えよ、という考え方が、男と女の関係の中に置き直されている。即ち結婚式で、汝らは愛し合え、と二人のものは言い渡される。即ち不可能の愛が、結婚の中にまで持ち込まれるのだ。男と女との執着を、宗教の中に設けられた愛という言葉で規定し、それと同質のものと見なそうとする傾向は、ヨーロッパ系文化の中の目立った特色である。もし肉体のつながりがなくても、二人の人間が共に住み、愛し合う関係において生きるということは不可能である。宗教の力が働かなければ、最善の場合にも、孔子の勧告したような、他人を傷つけるな、という程度の関係しかそこにあり得ないのだ。しかも、もっと残酷で主我的な肉体の関係を含むとき、夫婦の間における愛はもっと困難になる。つまり信仰による祈り、懺悔などがない時に、夫婦の関係を「愛」という言葉で表現することには、大きな、根本的な虚偽が実在している。

明治以来、我々が取り入れた西洋文学の恋愛の思想は、このようなキリスト教の宗教生活の中でのみ実践性があるものである。それを我々はその実践性、願望や祈りや懺悔などを抜きにして、形の上でのみ、疑うべからざる最も合理的で道徳的な人類の秩序の考え方として受け容れている。勿論日本にもキリストチャンは多い。しかし、我々一般日本人の目には、あの日本人のクリスチャンたちのあり方は、実に多くの偽善性によって疑わしいものに見え、演戲的なわざとらしい祈りや懺悔の習慣によって非現実的な宗教とされている。賀川豊彦氏のような世界的に認められている大きな存在ですら、日本の知識階級は、何か疑わしい、ジェスチュアの多い、

かなり演出の多い存在であると感じている。日本の良質のジャーナリズムの賀川氏に対する白眼視がそういうところに根ざしているのは疑うことができない。

それは我ら一般の日本知識階級は、不可能な愛というものを信じていないからである。不可能なことを目指して努力し、実現に到達し得ないことを感じて祈り、完成し得ないことを待ち望むことのソラゾラしさが、我々の目にクリスチャンを偽善者のように見させるのだ。我々には不可能なことから退いて自己を守るという謙譲や思いやりはあっても、他者を自己と同一視しようというような、あり得ないことへの努力の中には虚偽を見出すのだ。我々は憐れみ、同情、手控え、躊躇いなどを他者に対して抱くが、しかし真実の愛を抱くことは不可能だと考え、抱く努力もしないのだ。即ち仏教的に言えば、そのような愛を抱くことが我々の罪深い本性であり、その本性を持ったまま我々を救うのは仏なのである。

だから男女の間の接触を理想的なものたらしめようとするとき、ヨーロッパ系の愛という言葉を使うのは、我々には、睹られるのである。それは「惚れること」であり、「恋すること」、「慕うこと」である。しかし愛ではない。性というもっとも主我的なものをも、他者への愛というものに鈍化させようとする心的努力の習慣がないのだ。

以上のような心的習慣を持つ東洋人中の東洋人たる日本人が、明治初年以來、「愛」という翻訳言葉を輸入し、それによって男女の間の恋を描き、説明し、証明しようとしたことが、どのような無理、空転、虚偽をもたらしたかは、私が最大限に譲歩しても疑うことができない。即ち、人類愛、ヒューマニズムという言葉も同様である。しかし、それは輸入され、透谷の考え方、蘆花の考え方、それを引きつぐ白樺系の人々の考え方の中で、恋は愛というものに転換されなかった。その考え方は、隷属的であった女性たちに人間らしい立場を与え、という功利性を持っていたので、実質上役に立った。しかし役に立ったからと言って、その本質にある虚偽性を否定することはできない。やがてそこから大きな思考の空転が生れて来たのだ。我々はこの百年間に、実に多くのヨーロッパ文学、ヨーロッパ思想を輸入し、我々はその系統の考え方に慣れ、それをずいぶん消化している。そして、相当の程度まで我々は、クリスチャンでないにかかわらず、キリスト教化され、それと同質

化している。しかし、我々には「愛」を、人間にとって不可能でありながら祈りによって実現しようと努めるべきものだ、というところまで入り込んでいるだろうか。私は否と言いたい。クリスチャンたちが祈りや、懺悔に見出している気持を、やや滑稽な演戯性のあるものと見なしている間は、我々は異邦人なのだ。

我々にとって男女の愛は、恋である。それを愛に同化したいという祈りの念を我々は持っていない。我々は、他者と非現世的な愛という形で組み合わされることにはおびえがちな。我々は社会を離れ、隠遁し、孤独になるときに心の平安を得るという古い心的習慣をまだ強く持っている。他者との結びつきには我々を不安にするものが常にあるのだ。我々が他者との間に秩序を形成するとき、それは他者を同一のひとと見るよりは、上下の關係において見る傾向を持っている。日本人にとっての夫婦の愛情は、赦し合いという実質を持つかまたは真の執着そのものである。

日本語は、ある存在と別な存在との關係を論理的に説明するには大変不便な構造を持っている。關係代名詞のないこと、前置詞の曖昧なこと等がそれである。ヨーロッパ語の論理的な叙述を日本語に移すとき、それが如何に混乱を呼び、分りにくいものになるかは、何人も知っていることである。そして日本語は、第一人称の代名詞において驚くほど豊かなのだ。私、俺、手前、アッチ、オレ、わたくし、余、自分、オラ、あたい、僕等々それは十数種を数える。これらは、それを使うとき直ちに、その人間の他者との關係を決定する。夫か妻か下僕か主人か兵士か大名か等々までが分る。それは主として上下の關係を対者との間に明確に示す。僕という卑下の言葉が対等の關係を示す、などということすら奇妙である。つまり卑下の形においてしか平等はあり得ないのだ。男性における上下の關係の外に、男女の關係、更に男と女の間の上下の關係をもそれは明らかに示す。主語を置くのみで、上下の秩序は明確になるのだ。勿論第二人称の代名詞も同様に豊富で細緻に分れており、動詞のみによっても上下の關係が明確になること、主語のない古典作品の文章にしばしば見るところである。ヨーロッパ語において敬意をもって他者との結びつきを示すときは、このような代名詞による決定でなく、その關係の単純ならざることを複雑な説明として述べるが、これは日本語の場合に較べて目立つ点である。

上下の秩序づけは明確であるが、他者との論理的關係の説明には役に立たないという日本語の構造は、その

ままた我々の思考形式を示していると言っている。我々はこの百年間に、歴史上にほとんど類を見ないほど変化し西欧化した民族であると言われている。しかし我々はなおこのような構造の言葉でものを考え、ものを表現しているのだ。決して我々は本質的に西欧化したとは言われない。

多分、愛という言葉は、我々には、同情、憐れみ、遠慮、気づかい、というものの、最上の場合で慈悲というようなものとしてしか実感されていないのだ。そして、そのような愛という言葉は、日本人が恋において使い、夫婦において使い、ヒューマニズムという言葉は、道徳の最終形式のように使うとき、そこには、大きな埋められない空白が残るのだ。この西欧の考え方は、我々を封建制度から解放し、女性を家庭の奴隷的状态から解放した。それとともに、我々を別個な虚偽、キリスト教の救済性を持たぬ虚偽の中に導き入れたのだ。

近代文学の方法と我々が考えているものの中での人間関係は、祈りや実践を伴う愛という觀念にのみ支えられているのである。そして、その愛なる核を我々は持たないのである。我々は、政治関係、社会関係において、また恋や夫婦関係において、我々の本来の考え方による実践形式を持っている。我々が無為でヨーロッパ人のみが行動しているわけではない。しかし我々の純粹な行為というものは、多分、自己を社会から切り離す時の清潔さを求める行動であり、でなければある集団の利益、国民的な名誉というような熱狂を核とする我を失う行為、または上下の秩序への献身という自己放棄による犠牲の非痛感などに支えられたものではなかったろうか？

キリスト教系の祈りの発想のないところでの夫婦の愛というものは、大きな疑いの目で見直されなければならない。ヨーロッパ思想の最大の虚偽（やむを得ざるところの）が存在しているのは、「愛」という言葉による男女の結合においてである。その点では、我々の方が遙かにリアリストである。我々は恋と慈悲との区別を知っている。愛という言葉は優しい甘美なものとしてその関係に使う場合にも、我々は「恋愛」として限定する。その実質において征服と被征服の関係であり、相互利用の関係であり、または肉体の強力な結びつきにおいて、対象を取り変えないことを道徳的に拘束するこの関係を、神の存在を前提としてのみ成立し得る「愛」によって説明して来たこの百年間に、異教徒の日本人の間に多くの悲劇が生れた。

男女の結びつきを翻訳語の「愛」で考える習慣が日本の智識階級の間に出てから、いかに多くの女性が、

そのために絶望を感じなければならなかったらう？人間の男女が自由に交際し、他者と触れることに生き甲斐を感じずるキリスト教系の思考法による交際社会のない日本では、多くの男女は「愛」のない見合結婚をしなければならず、それを彼らは不満に感じた。また恋を合せて結婚した女は、それを「愛」という言葉で錯覚するために、人間の交際は独立の男と男の間にのみあり、その席に出る女は本質上娼婦に過ぎないという日本の社会で、確実にやって来る男性の娼婦買いに直面して、「愛」という永遠なものが失われたことを、大きな絶望とともに味わわねばならない。一九五八年度から日本では娼婦は廃された。しかし、男性が仕事をし、交際してるところの場所には、実質上の娼婦である酒場の女、女給、芸者がいるのであり、彼女らは自己を男性に売ろうとしてそばに侍っている。男性は極めて容易にそれらの女性とすぐ触れる社会に生きているのだ。即ち公式的には永遠の「愛」というもので女性と結婚した男性は、実質的には仕事と交際において日夜、娼婦たちの中に混って生活しているのである。結婚の公式と社会生活の実質とは、いちじるしく違い、女たちは公式を信じ、男は実質を信じている。これは、江戸時代と極めて近いあり方なのだ。だから江戸時代のように男女の関係が、惚れている、恋しているという言葉で語られ、愛という怖ろしい言葉で語られていなければ、そのような時に男性に裏切られる女性の傷手ははるかに軽いであろう。

私はこのことをもって、実質上、日本の女のあり方は江戸時代的なものだから、男性に性的放縦さをゆるせ、と言っているのではない。愛という言葉のキリスト教的な祈りと、不可能な道徳への反復的努力のないところで、愛という偽りに満ちた言葉を使うな、と言っているのである。親子の関係の方は、愛という言葉で語られるにはもっととふさわしい。そこには性に基く自我への執着が少ないからである。その親子の愛ですら、キリスト自身はその母を拒まなければならなかったように、真の愛とは違うところの主我的なものである。いかなる母親も自分の子を愛するように隣人の子を愛することはできないのだ。そして現に我々は、子への愛という言葉によって、子供を自己の虚栄心の犠牲にしがちなのである。その時、「愛」は愛でなくて支配である。

多分キリストの考えた愛の思想は最も正しいのだらうと思う。人間はいよいよ組み合せにおいてのみ存在しなければならなくなり、孤独と逃避はゆるされない。人間は他者とふれ合って平安を持たねばならぬ。だから、こ

の不可能への挑戦を質とする愛なしには、人間の組み合せの平安はないであろう。だから夫婦の結びつきをも、その不可能性への挑戦としての願いや祈りを含めば、愛という言葉で説明していいのだろう。しかしそれは、神の立ち会いを求めることによってのみ可能なのである。信仰の衰退とともに、キリスト教徒の間でも、夫婦が愛で結びつくことがいかに不可能であるかという物語りが、特に二十世紀に入ってから、次々と書かれていく。夫婦の結びつきは現実には主我的人間の攻守同盟的結びつきに外ならないのであり、貞潔の約束は強制と隷属に変化しており、そこで最も無視されるのは愛であることは、幾多の文学作品によって証明されて来たのだ。

心的習慣としての他者への愛の働きかけのない日本で、それが、愛という言葉で表現されるとき、そこには、殆ど間違いなしに虚偽が生れる。毎日の新聞の身上相談を見るだけでも足りる。「私の方で愛しているのに私を棄てた」とか、「私を愛さなくなったのは彼が悪い」などという考え方でそれらは書かれている。実質上の性の束縛の強制を愛という言葉で現代の男女は考えているのだ。愛してなどいるのではなく、恋し、慕い、執着し、強制し、束縛し合い、やがて飽き、逃走しているだけなのである。

明治以来の文学作品の中で、この偽りの「愛」は次第に形式的に考え方の中に入ってきて、我々の近代文学を骨抜きにしている気配が相当に濃厚である。島崎藤村の姪が叔父なる彼への執着を愛と錯覚しているとき、それは大きな嘘の只中にあることを示している。国木田独步は、佐々城信子への執着を愛だと錯覚し、清らかな神を求める生活を妻と二人で築き得ると考え、そのように実践して失敗した。「不如帰」を書いた徳富蘆花は、妻のフトンを乗り越えて女中のフトンの中に這い込むような怖ろしい生活をしなければならなかった。晩年になって彼は、自分と妻とを日子、日女と考え、神に直結していると思った。その時ようやく彼は性を夫婦の間で安定したものと為し得た。多分その時の蘆花は、最もヨーロッパ的結婚愛に近いところにいたであろう。

信仰の薄れるとき忽ち虚偽のものとなる結婚愛を実質のあるものとするために、ヨーロッパでは、伝統と習慣の保護がある。即ち青年は、いくら強く女性を愛していても、十分な収入なしに結婚するのは悪徳であるという安全な社会通念が存在している。そういうものなしの、「愛」を口実とし、前提とする結婚は、ヨーロッパ

では妥当なものと見なされないのだ。十九世紀までのヨーロッパでは、娘を結婚させるとき、父母は娘の生涯を保証するに足る持参金を持たせ、経済的独立人として人妻にしてやったのだ。即ち、愛が失われても人格が保証されるだけの支えを与えるべき責任が娘の父母にあったのだ。日本では持参金つきの嫁は、夫の非力の証明とされていたのだ。彼らにおいては「愛」による結婚生活は、十分なる経済条件という暗黙の、しかし強靱な習慣の上にのみ存在していたのである。

我々は「愛」を輸入した。しかし、祈りも懺悔も、持参金も、十分なる夫の収入も輸入しなかった。いな、経済条件の伴わぬところに、宗教心の働きのないところに愛を輸入して、実質的な言葉であった惚れるや恋するに代置き、それによって男女の関係を虚偽のものとしたのである。そしてこのことが、近代日本文学における停滞と薄弱さを生んでいるにちがいない。また人間関係についての正確な思考を追求しようとするとき、我々はこの間違いのために、多くの躓きを生み出しているにちがいないのだ。

愛という上昇努力のプラスのないうところに、マイナスとしての罪は実感されないだろう。仏教の信仰の中にも、慈悲というものの反対概念としての罪がある。その宗教心がともに失われているのが現代である。姦通が罰されなくなったのがその証明である。そこに良心の罪があり得ない。従って主我的なことが正義と同質化するという無信仰の怖れがいま世界に行きわたっている。人間は未来の怖れという強制のないところにおいて良心的であり得ないのだ。現実に我々信仰なき日本人には、孔子の言ったこと、即ち他者に迷惑をかけるなどという節度を伝統的に持っている。その点ではリアリストであり、信仰なきヨーロッパ人ほど悪への執着を強くは持っていない。我々を實在にふれさせる認識法としては、仏教系のものでしてゼロ即ち無または死の意識で實在を認める方法がある。それを私は我々の劣れるところとは必ずしも考えない。他者との組み合せのみに善を見出し、孤独をゆるさぬ社会では、原子爆弾が作られ、人間の区別の撤廃という善の強制の共産主義社会を産み出した。いずれが人間をより平安に置く力が強いかは、まだ分っていない。無というものもまた絶対であることによって、神という絶対と同じ働きをし、それによって、即ち無の意識との対照によって我々は心の平安を保つことができ、また實在を把握することが出来、それが伝統的に日本の芸術の方法となっている。たわむれにこ

の關係を数学的に表現すれば、我々がゼロと、算術級数的に加算される数としてのプラスを持っているとき、ヨーロッパ人、キリスト教徒は幾何級数的に組み合わされて急に力を増す愛という整数と、それに対応する負数とを持っているように考えられる。負数を意識することの、罪なるものを意識することの大きな負担から、我々は解放されている。そのいずれがより正しい認識であるか？私はその二つのものの前に立って決しかねている。

虚 虚 実 実

映画を見ていたおばあさんが、画面にあらわれた自分の方へ向って驀進して来る列車を見ると、悲鳴をあげて逃げ出したという話は、おそらくつくり話であろうけれども、ありそうなことではある。

また、はじめてシネ라마が上演されるようになったころのこと、その迫力のある、刺激のつよいシーンで、気絶した人があったということが伝えられた。心臓の悪い人はさけた方がよいということもささやかれたようである。あるいは宣伝のトリックかもしれない。しかし、そういう話は、すなおに信じられるところがある。映画のもっている特質の一面にふれるものであろう。

しかし、それと同時に、映画を見て、それを本当だと思ふのは幼稚であるという一般的な考え方もある。「開けた」人間ならば、映画というフィクションを現実と混同して、涙を流したり、はらはらしたり、こわがったりはしないものであるというのである。映画とわれわれのまわりの世界とを、はっきり別ものとして区別してかかる。それが大人の映画の見方であるとされる。

こういう風に、映画を別世界として意識しながら見るのが正常なのか、あるいは、汽車が来るといって、見ている映画から逃げ出すのが正常なのか、これは、にわかには決せられない問題である。

しかし、もし、後者の逃げ出すような人がまったくいないということになれば、すくなくとも、映画が今日のよきな表現形式をとらないであろうことは、たしかである。画面を見てにげ出したおばあさんは、あるいは、映画のねらっている表現効果に、もっとも自然に、素朴に反応しているのかもしれない。

現実において、汽車が自分の方へ走って来れば、逃げないと危険である。汽車にひかれたら命はない。ところが、画面に映っている汽車はこちらへ走って来ても、決して観客にぶつからない。かりにぶつかったとしても、かすり傷一つ与えることもできない汽車の絵であって、物理的力はない。

映画は現実世界の映像を再現することができる。しかし、現実の物理的物体のもっている、エネルギー、重さ、硬さ、内質などは表現することができない。映画にはいわゆる質量がまったく欠けているのである。どれほど

真に迫（せま）っていて、映画（えい）の中（なか）の猛獸（もうじゆう）は觀客（かんきやく）席（せき）の虫（むし）一匹（いっぴき）を殺（ころ）すこともできない。これはもつとも初歩（しよほ）的な映画（えい）の約束（やくそく）である。

ただし、映画（えい）の画面（がめん）の中（なか）では、列車（れっしや）が人（ひと）をひけば、人は死（し）ぬ。その関係（かんけい）はわれわれの現実（げんじつ）の世界（せかい）とちがうところがない。そこから、映画（えい）を現実（げんじつ）と同一（どういつ）視（し）しようという傾向（けいこう）が生（し）ずるのであるが、映画（えい）は現実（げんじつ）から質量（しつりよう）その他（た）を抜き去（さ）った虚（きよ）の世界（せかい）である。同じ（おな）ではない。

このように考（かん）えると、驀（ばく）進（しん）して來（く）る列車（れっしや）を平氣（へいき）で見（み）ていられるということも「映画（えい）的（てき）」であり、悲鳴（ひめい）をあげて逃（に）げ出（だ）すこともやはり「映画（えい）的（てき）」であるといつてよいことになる。

ここでは、しかし、素朴（そぼく）であると笑（わら）われがちの後者（こうしや）のような反応（はんおう）の中に、一般（いっぽん）の理解（りかい）の原型（げんけい）がひそんでいるのではないかということに反省（はんせい）してみたい。映画（えい）を現実（げんじつ）と同じ（おな）もののよう（よう）に感（かん）ずることが、かならずしも、幼稚（ようち）ではなく、むしろ、そこにこそ、表現（ひょうげん）行為（こうい）と表現（ひょうげん）理解（りかい）にとつて、欠（か）くべからざる要素（ようそ）がひそんでいるように思（おも）われる。

*

われわれが日常（にちじよう）の生活（せいかつ）で目（め）にふれる物象（ぶつしやう）は、色（いろ）や形（かたち）などの外見（がいけん）と、重（おも）さや硬（かた）さなどの内質（ないしつ）とをともにもつている。汽車（きしや）は汽車（きしや）の形（かたち）をしてい（い）ると同時に、はげしい勢（いきおい）で運動（うんどう）する鉄（てつ）の車（くるま）である。前者（ぜんしや）の形象（けいしやう）の方は、つねに直接（ちやくせつ）に視覚（しかく）でとらえることができる。しかし、それが鉄（てつ）でできているか、あるいは木製（もくせい）であるかということになると、すこしはなれてい（い）れば、もう直接的（ちやくせつてき）に認識（にんしき）することは困難（こんなん）である。ほかの条件（じようけん）からの類推（るいすい）や知識（ちしき）によつて、内質（ないしつ）についての理解（りかい）に到達（とうたつ）する。一般（いっぽん）に、内質（ないしつ）、質量（しつりよう）は、形象（けいしやう）に比（くら）べて、よりいっそう概念的（がいねんてき）である。ということは、ありのままを描（えが）く表現（ひょうげん）（再現（さいげん）様式（ようしき））にとつて、質量（しつりよう）は形象（けいしやう）よりも扱い（あつか）にくい部分（ぶぶん）である。さらに、再現（さいげん）的な表現（ひょうげん）にとつては、形象（けいしやう）の方がはるかに重要（じゆうよう）でもある。

現実（げんじつ）の汽車（きしや）には、形（かたち）と質量（しつりよう）の両方（りやうほう）が具（そな）わつてい（い）る。見る者（もの）もそれ（それ）を感（かん）ずる。くりかえしくりかえし、ある形（かたち）がある特定（とくてい）の質量（しつりよう）を蔵（ぞう）してい（い）ることを経験（けいけん）すると、もはや形（かたち）と質量（しつりよう）とは不可分（ふかぶん）のものになる。形（かたち）を見（み）ると、すぐに質量（しつりよう）をも感（かん）ずるようになる。そういう段階（だんかい）に達（たつ）した人間（にんげん）に、映画（えい）を見（み）せると、汽車（きしや）は現実（げんじつ）と同じ（おな）形（かたち）をして

いるから、その形を見ただけで、それに「附随しているであろう」質量を感じる。ところが、実際、映画は絵であって、質量のない世界である。映画の観客が質量を感じたとするならば、それは無いものを、あるかのよう思い込んだことで、錯覚である。

二つのものがつねに組合わさっていて、それがたえず経験の対象になっているとき、なにかの事情で、そのうちの一つが欠けていても、欠けていることに気付かないものである。さらには、一つだけから二つのものに等しい効果を感じとることもできる。きれいなバラの花を描いた絵を見ていて、ふと、バラの香りがただようように感ずることは稀ではない。日常バラは美しい色と独特の芳香をもっていて、近くでバラを見れば、香りがすることに馴れている。それがほとんど条件反射的關係になっているから、絵のバラを見ただけで香りを感ずることがあるのであろう。

二つ揃っているべきものの一つが欠けていると、残っている方が、欠損した方を誘発すると考えることもできる。また、二つの揃っているものの片方がないと、そこが真空の状態になって、本来あるべきもののイメージを引き出し、補充すると考えることも可能である。

とにかく、表現されていないものを、あるように感ずるのは、錯覚である。

しかし、映画を見ている人たちが、映画には形象しかないから、かりに質量を感じるとすれば、それは錯覚であるというような反省をしていることはまずないであろう。それほど形象の表現が強烈である。したがって、質量もかなりリアリスティックなものとして印象されている。映画のエネルギーということ疑われない人は多いが、元来、映画にはエネルギーを伝える直接の手段はない。ただ、イメージによって、エネルギーも質量も表そうとしている。(モノクローム「黒白」)映画では、イメージも、そのままを表現しないで、一色で色彩を感じさせている。)

一つのもので他を表わす、こういう代行表現は、映画に限るものではない。一般に表現というものは、多少とも、実像によって、虚像の部分を埋める作用に依存しているものである。

物理的世界には、形象と質量がある。映画では形象の方はある程度再現するけれども、質量は欠けている。

しかるに、人々は、映画を、だいたい、物理的世界の忠実な再現であると思つて見ている。質量が映画には表現されていないことに気付かない。それは映画の映像が補償しているからであらう。映画が現実の形象を正確にとらえようとしていなければならないほど、映像が質量を代行、あるいは補償する作用もつよくなる。別のことばで言えば、映像が質量感を濃厚に帯びるようになるのである。

現実の汽車が、人をひき殺す質量をもつものであれば、それとそっくり同じ姿をした映画の中の汽車も、ぶつかれば、人をひき殺すにちがいないと感ずる。現実を表現の中へ移して考えるこういうアナロジーは映画だけのものではなく、一般に表現を成立させている一つの原理である。このアナロジーがはたらかないところは、表現行為は起らない。表現の理解もない。

現実の世界を、映画で表現しようとするとき、そのすべてを再現することは不可能である。まず、現実のどの部分を切りとるか、それを選択しなければならぬ。選択は省略と表裏をなしている。さらに、その選ばれた部分についても、すべてを再現できない。強調すべきところと、そうでない細部とに分けて、前者が大きく扱われる。くりかえしのべているように、質量は、まったく、再現が不可能である。こうしてみると、映画が再現しているのは、現実のごくごく一部であるにすぎないことがわかる。そういう映画がリアリスティックな印象を与えるのは、部分的表現が、現実の全体に等価なものと錯覚されるからにはかならない。その錯覚が代行、補償の作用である。これは、見者が、表現の中へ何かをもちこむはたらきであるとしてよい。

表現は対象のすべてを描けない。いや描こうとしないのである。むしろ、なるべく省略の度合を高めることが、表現の経済原則に合致するのである。しかも、表現が省略されたものであることを感じさせるのは、表現として拙いのである。表現はすべてを描かないが、すべてが表わされているような感じをいだかせることを目指している。そして、それを可能にしているが、受容者側の補償の作用である。

重要な部分が有効に表わされていれば、欠けている部分は埋められ、虚像は実像と同じようなものに感じられる。これは表現理解にあたって、受容者が自分では気付かずに行っている創造活動である。虚と実の隔りの大きい、したがって、それだけに補償のはたらきも活発でなければならない芸術作品の鑑賞が、独特の喜びを

与えるのは、この創造活動と無関係ではあるまい。

シネラマを見て気絶するというのも、虚像である画面を、真実の世界と同じものと感ずるために起ることであるが、こういう混同が起りうるからこそ、表現ということが、力をもち得るのであるし、部分で全体をカバーできるのである。それは、決して例外的なことでも、笑うべきことでもない。

現実において、結合の強固な要素同士であればあるほど、その一部分の省略の可能性は大きくなる。相手がきまり切ったことを言う場合には、一を聞いて十を悟ることも難しくない。くだくだしい言い方はさけて、要点のみをのべれば足りる。

そういう例として、対象のもっとも代表的な特徴を一つだけあらわして、あとは全部省略することばの用法がある。

修辞学では、それに提喩という術語をあてている。たとえば、帆(sail)で船(ship)をあらわし、冠(crown)で王(king)のことをあらわすのが、この提喩である。すなわち、有効に与えられた部分は、全体を意味することができるのである。そういう方法によって、表現は、リプレゼンテーション(再現)の性格のつよいものから、漸次、シンボリズム(象徴)へ移行して行くことができる。さらにモットーとか諺とか、あるいは、マークなども、提喩としての性格をもっていて、より大きな次元のものを代表する。頭文字の略号が、やはり、完全な名称に対して、似たような関係にあると見てよからう。

表現を試みるものは、まず、対象を忠実に捉え、伝えようとするであろう。しかし、それが不可能であることがはつきり認識されると、つぎには、対象となるべく等価であるような部分を選ぶことを考えるようになる。そこから表現の選択性、ひいては、経済ということが生ずる。そのような部分、部分の表現によって、描かれていないもの、描くことのできないものまでを感じさせることができるのは、人間の理解の中に一定の力があるためだと考えてよいであろう。その力は修辞学で提喩を成り立たせている作用と同じものである。それは、表現のあるところに、つねにはたらいでいるにちがいない。

この力をかりにここで、補償・連合作用と名付けよう。必然的に部分的点描にならざるを得ない宿命をもつ

ている表現ということ自体が可能であるのは、この姿なき補償・連合作用の上に立脚しているからである。これは人々がその存在を意識しないほどに、普遍的な作用である。

*

映画は物理的世界の質量を表現することこそできないが、その他の点では、見るものに「そっくり」であるという感じを与える。それに比べると、言語の表現は、対象をありのまま伝える度合がずっと低くなっている。映画は形象を平面的ではあるが再現できる。言語表現は、その形象を描くにも間接的な方法によるほかはない。そういうことばのうちで、もっとも再現的なのは、おそらく擬声語（オノマトピア）であろうが、その擬声語も、映画が対象を再現する度合に比べれば、象徴的ですらある。しかるに、そういう言語によって、「人生をありのままに描いた」と人に感じさせるような表現を行うことができるが、それは、抽象されたことばの表現によって、具体的な世界が喚起されるからで、さきの補償・連合作用によるのである。

自然、人間を問わず、描こうとする対象の世界で、いつも一緒になっているものをはっきり理解する。そうしたら、その中の重要なもののみを選び出して、あるパターンに即して配列する。そうすると補償・連合作用がはたらいて、描かれていないところも、表現されており、わかったような印象を与える。表現が全体像を表現し得ているように感じられるのは、このようにして描かれていない虚の世界が巧みに補償されているからである。

それで、もし、表現の受容者の側に、表現者が描こうとしている対象全体についての経験が乏しいか、あるいは全くないかすると、言語表現の理解は困難、または、不可能に陥る。実像の表現部だけではまとまりのある意味を結ばないとき、それと密接不可分であるべきものが何であるか、経験によって保証されないと、補償作用は発動しようがないからである。言語表現の理解には対象に関して、何らかの経験を前提としている。映画なら外国の風物を見ても、絵としてある程度は理解される。ところが、外国語の表現は、そのことばを学ぶまで、理解は成立しない。映画より言語の方が抽象性が大きいからである。

ことばの表現はつねに抽象的な性格をもつものであるが、ことばを理解するには、感覚的経験の裏付けがな

くてはならない。触覚、味覚以外のあらゆる感覚を奪われてしまっていたヘレン・ケラーがことばを理解するのにたいへんな困難に遭ったのはそのためである。正常な感覚にめぐまれていた人間は、ことばを感覚的、具體的、事実と結合させるのにそれほど苦勞はしないけれども、その結合ができるまで、ことばは使用もできない、理解することもできない。

甲の文章を乙が読むとき、甲の言わんとするところについて、乙が全く不案内であれば、乙は甲の文章を解することができない。甲が乙の知らない外国語や暗号を用いていけば、そういうことになる。しかし、同一言語では、こういう極端なことは稀で、なんらかの共有経験があると考えられる。

ところで、乙が甲の文章からBという世界を理解し得たとする。このBはもと甲が表現しようとした世界Aとは、かならずいくらかは異なっている。読者が作者の表現に托したものとまったく同一の世界を導き出すことはまず考えられない。二人以上の人が、全然同じである感覚的経験をしているということがあり得ない以上、これはやむを得ないことである。

もし、乙が甲の文章からBでなくて、Aを読みとることを要請されているとするならば、乙のBは誤読、誤解になる。しかし、AがBになるという誤差は、言語のような高度の抽象、省略の表現では、むしろ当然のことである。一般には、それを誤差と言ったり、ことさらに問題にしたりはしないことになっている。

文学作品は、そういういわば正常な誤読を活発に起させるためのものであるとすら言いうる。文学の中でも、詩の抽象がもっともいちじるしい。詩はきわめて非再現的な表現であって、読者がそれを読んでも、詩人が意図した世界そのものに至ることはまず不可能である。詩の読者は、与えられたことばを手がかりとして、自分の感覚を反映する大規模な補償・連合を行い、創造的理解とでもいうべきものを行うことになる。そして、それが決して不愉快なものとは限らないのである。理解の困難なはずの詩が、より再現的な散文以上におもしろいという感じを与えることがあり得るのは、この間の事実に関係するのであろう。

*

われわれは、ことばの中には、力やエネルギーが含まれていないことを承知している。それにもかかわらず、

「力づよいことば（文章）」とか、「ことばにうたれる」とかいうことを平気で口にする。そして、実際に、ただ単なる比喩でなくて、ことばの力といったものを感じることがある。ことばでは、力を表現できないが、すぐれた表現は、虚像としての力を、実際のエネルギーのように感じさせる補償を起す。それが読者に感覚的な反応を生じさせるのであろう。

ことばで直接的に表現できないものを、間接に表わそうとする手段の一つに比喩がある。（提喩も比喩の一種である。） いったい、比喩が成立するのは、部分的なもの、間接的なもの、抽象的なものを、全体、直接、具体へ連合していくはたらきがわれわれに具わっているからで、さきの「力づよいことば」というような比喩も、これによって、伝え得ないはずのエネルギーのあることを感じさせるのである。

さらに、言語表現はすべて比喩であると考えられることも許されるであろう。対象をありのままに描くことはできない。しいて表現しようとするれば、どうしても、抽象し、省略し、ほかのもので置きかえてやらなくてはならない。これは広義の比喩である。

時代が古くなればなるほど、どの言語においても比喩の比重が大きくなっているように思われる。神話時代の人々は、ものごとをありのままに描くということとは考えなかったであろう。かりに知っていても、それにあまり意義を認めなかったと思われる。どこの国においても、より再現的な媒体である散文の方が、韻文よりも遅れて発達していることに照してもこれは首肯されよう。

表現者は、実体のあるものを比喩にし、虚像にして描く。その表現を理解しようとする受容者は、虚像を実像に還元し、抽象的部分を具体的全体に関係づける。

言語表現は、こういう実から虚、虚から実への往復によって、伝達を目ざしているものである。言語の使用と理解とは、この実と虚が一体となったところにおいてのみ考えられる。

この虚と実が相互に絶えず関係づけられていると、一方の実を見れば、ただちに虚を思い、虚は知らず知らずに実を誘発することになって、虚実の自由交換が保証される。そうすると、本来は対照的なものであるはずの実と虚が、いつのまにか等価的なものであるように感じられるようになる。

ことば自体には良いことばと、悪いことばというものがあるわけではない。しかるに、上流の人々のことばは上品なことば、良いことばとして尊重される一方、社会で認められない人々の用いることばは、はしたない、わるいことばとしてきらわれる。

神をあらわすことばは、神そのものではなく、神の名であるにすぎないが、神そのもののように敬し畏れられる。神の名をけがすことは、神そのものの冒瀆にすらなる。

「便所」ということばを聞いただけで、何だかくさいような気がする。ことばに臭気を伝える力はないが、ことばがその場所との関係を不可分なものにすると、実体が虚としてのことばに乗り移る。そこでこの虚実一体化をきらい、「手洗い」と変える。しばらくは良いが、やがて、これにも臭いがついて来る。それで、こんどは「トイレ」として、虚実合体を崩そうとする。好ましくない虚実の交換を阻むには、こういうことを次々とくりかえさなくてはならない。

ことばにはまた、婉曲語法というものがある。「死ぬ」の代りに「亡くなる」、「ねむる」などというのがそれである。これは、ことばが対象の実像をあまりはつきりと意識させないために、別のことばを代用するもので、やはり虚実の交換自在を傍証する言語現象である。

文学作品という一つの虚の世界を読んで、そこにある現実を理解するのは、一つ一つのことばの場合よりも、大規模な、高度の抽象と具体、虚と実の翻訳による。作品を作者の生活、思想などと結びつけるのも、虚が実を呼び、両者が一体になろうとする傾向を示す一例である。

文学に親しむことが、読者にとって、しばしば代償経験としての意義をもっているのも、虚像の表現から実際の人生経験を創造して、それを自分のなまの経験のようなものとして読むからである。文学作品から強い感銘を受けるのは、映画の中の汽車を見て逃げ出すことと、根本においては相通ずるところがある。文学の読者がそういう映画の観客を笑うことはできない。

傾いた砂時計のような話

私には、のんびりした叔母がひとりいる。どうのんびりしているかという、たとえば彼女がかつて、姉である私の亡母によこした手紙の一つはこうなのだ。

……いま、紅梅も白梅も満開で、本当に綺麗。それに、沈丁花の香りでいっぱいなのよ。馬酔木も小さな花をつけました。山根様の奥様もやっと退院できることになったんですって。よかったわね。ちよっと、待って。ちよっと、筆をおきます。いま、Tが呼んでいるの。

……また書きつづけようとして気がついたら、早いもので、咲いているお花がすっかり変わっていました。月の光を浴びて一面に咲いているのは海棠です。このあいだまで猿すべりと夾竹桃が花ざかりだったのに、それも終って、いまお庭は虫の声でいっぱい。山根様の奥様から昨日お手紙が来しました。転勤なさったことはお知らせしたかしら？ ごめんなさい、まだだったわ。

……夫に呼ばれて筆をおいたあいだに半年以上が経過し、便箋一枚のあいだで「山根様の奥様」は退院した上、転勤までしているのである。

この手紙を読んで、母は「長生きするね、この子は」と言ったが、よほど気にいったものとみえてこの手紙は大事にとってあって、母の死後、手文庫から出て来た。

時間というものは、どこでも、誰にでも、同じ速さで流れるものではないらしい。その人のところへ来ると急に時間が足踏みしてしまうような人がいるように、時間がとりわけのんびり流れている場所というものもあるようだ。

前回もその段階のことを書いた、スペインはバルセロナの、ガウディの未完の大作、サグラダ・ファミリア贖罪聖堂もその一つで、もう百年以上工事をつづけているのだが、完成までにあと五百年は必要だというので

ある。

「あと、確実に五百年はかかります」と言ったのは、この工事現場で働いている唯一の日本人、外尾悦郎氏で、外尾さんはこの聖堂の三つのファサードのうち、ただ一つ壁面装飾の段階まで工事が進んでいる「降誕のファサード」の中の、ハープを奏でる天使像を彫りあげ、ことし（一九八五年）二月に壁面にとりつけた。その出来がよかったので、残りの「ヴィオラを弾く天使像」ほか三体を発注され、まだ当分はこの工事現場で働くという。

外尾さんの話によると、コツコツと手づくりでつくりつづけられているサグラダ・ファミリア聖堂の工事にために働いている人は、クレーン係りから石工、事務員まで含めて現在ぜんぶで二十人。わずかな人数だが、それでも、建築資金のすべてを献金に頼っているこの聖堂にとって、最大の出費が人件費なのだそうである。

致命的に金が足りないから、必要な針金などはなるべく拾って来るといふ。——という、よくあるように献金のほうもなりふり構わず集めているように思えるが、聖なる時間の流れているところは、さすが、そこが全くちがう。大口の寄附の申し込みもずいぶんあるが、信心が動機ではない筋の通らないものは、ぜんぶ断わっているのだそうである。

いまの御時勢だと、大口の寄附の目的はたいいてい宣伝か税逃れだから、日本からのものも含めて、ほとんどを断わることになる。では何が資金かといえは、見学者の入場料なのだそうだ。

「世界広しといえども、まだ工事中なのにこれだけ観光客を集めているふしぎな建物は、ほかにないんじゃないでしょうか」

と外尾さんが言うように、ここには毎日数千人の観光客が世界中から集まって来る。この人たちから入る「日銭」が、この聖堂に最もふさわしい純粋な建築資金なのだそうだ。

「……ほかは知らず、この聖堂に関する限り、工事の目的は完成にあるのではなくて、つくりつづけることにあのだ、と僕は思います。大口の寄附などがあると、かえってペースが狂って、いい結果にはならないでしょう」
こういうふうを考える人は、よほど純粋な理想主義者なのだろうと思って、そのへんをきいてみると、べつ

にガウディに心酔してここに在るわけじゃない、石で彫刻をさせてくれてお金をくれるところなら、どこへだって行きますよ、と外尾さんは言った。まだ三十代後半である。いろいろなタイプの国際的な日本人が出て来たものだ。

「……ぜんぶで十七本立つ予定の尖塔は、まだ八本しかできていないし、内部空間に至っては全く手をつけられていないけど、ある意味でこの聖堂はもう完成していると言えるように思うんです。これだけ世界中から若者を集めることのできるカトリック建築は、ほかに全くありませんからね。もうじゅうぶん、教会としての機能を果たしはじめているのではないですか」

彼がそう言ったら、横で聞いていたテレサ嬢がスペイン語で何やら熱心に質問した。何を言ったのか、ときいているらしい。私たちの撮影の世話をやいてくれたテレサ嬢は、工事事務所の遣り手で知的な庶務担当であった。外尾さんからの説明を聞くと、彼女はものすごい勢いで自分の意見をのべはじめた。それによると、とんでもない、教会としての機能を果たすのはまだまだ先だ、内部空間がすっかり出来あがって、十七本の尖塔がぜんぶ立って、高さ百メートルを超すその尖塔のそれぞれの内部に、長さ二十メートルのパイプが吊るされて、巨大な鐘楼としての役割を果たすようになってからだ、という。

額面通りに建築としての教会の機能についていえばそれにちがいないから、ではいつごろそうなるのか、ときいてみると、いまのままだったら六百年か七百年先、という答えが返って来たので、めまいがしそうになった。

そもそも、聖家族の名を冠した聖堂を建てることを思い立ったのは、このバルセロナで出版を業としていた信仰篤い教養人ポカペーリヤという人で、一八七二年のことだ、と物の本に書いてあるのだが、このテレサ嬢はその人の曾孫にあたるのだそうである。

そこから数えれば実に千年にちかいスケールで話をしているわけで、もう一度めまいがした。

こんなことがあったから、サグラダ・ファミリア聖堂を去るときに振り返ったら、その八本の尖塔は、まるで天から落ちる巨大な砂時計のようにみえたのである。

時間にせよ空間にせよ、あるいはもろもろの判断にせよ、人にはそれぞれ基準になる座標軸のようなものがあって、それが少しでも狂うと、ある程度のめまいをおこすのではなからうか。

このときバルセロナに一緒に行った私の相棒のMカメラマンは、豪放だが反面また実に律義で礼儀正しい男で、「……ねえ佐藤さん、あのお方は……」

と、道のわきに立っている男をそっと指さしながら、礼儀正しく佐藤さんにたずねた。佐藤さんは、もうずいぶん長くスペインに在住していて、私たちの案内役と通訳をつとめてくれた人で、彼も礼儀正しい人格者である。

「ねえ佐藤さん、あのお方は何ですか？」

と彼がきいているので私もそっちを見ると、偉そうな顔をした大男が何か書いてある厚紙を胸の前にかかげて立っている。

それをチラッと見た佐藤さん、小声で吐き出すように、

「コジキです！」

と言ったから、Mカメラマンは絶句してしまった。そして、うしろで一部始終を聞いていた私は笑いがとまらなくなり、涙まで流れて困ったのである。

厚紙には「長年職がない。だから足元のカンに金を入れてくれ」と書いてあるのだそうだ。……それにしても偉そうな顔であった。最初見たとき、誰かに似ている、ああ内田百閒だ、と思ったから余計おかしかったのである。

あれは、東京駅の一日駅長になって威張っている百閒先生の写真の顔そのままだった。尊敬している人の顔を連想したくらいだから、

「あのお方は何ですか」

「コジキです」

と、私たちが思い出しては繰り返すのでMカメラマンはクサったけれど、決して彼だけを笑ったわけではないのである。私たちの座標軸が狂っていることが分かったから、笑ってめまいを防いだのだ。

実際ヨーロッパには、王者のような風貌のコジキがよくいるのであって、半世紀も前に出版されたポール・モランの写真集『夜のパリ』にも、その代表的人物の肖像が一枚のっている。ありとあらゆる寄せ集めのボロを重ね着し豹の毛皮らしきものまで肩にかけた男が、セーヌ河畔のベンチに独り坐って、ソロモンの威厳とソクラテスの透徹を眼光と姿勢に凝縮して、道の彼方を睥睨している写真であった。

しかし、連中は連中で、日本文化を前にすると座標軸が狂うことがあるらしい。オーストラリアによく写生に行き、向こうでよく展覧会も開いている日本画家の山田真己さんに聞いた話なのだが、シドニーで開いた展覧会場で、一人の大男が山田さんの一枚の絵の前を動かず、長いあいだ唸っていたという。オーストラリアの風景を扇面に描いたものなのだが、小品だしそんなに感心される理由が分からないので、じっと見ていた山田画伯、ついにたまりかねてその男のそばへ行き、この絵を描いたのは私だ、そんなに感心してくれるのは実に有難い限りだが、何を感心してくれているのか教えてくれればもっと有難い、と言ったのだそうである。すると男が答えた。「おれは長いあいだトラックの運転手をやっているが、こんなに驚いたのははじめてだ。おれが毎日のように見ているものが絵になるなんて、夢にも思わなかった。あんたは天才かも知れん」

——どうも、言っていることがよく分からないのでいろいろ問いただしてみたら、彼は言った。「ワイパーを通して見えるものをそのまんま絵にしたなんて、あんたは天才だよ。誰が何と言ったって、おれが保証するよ」ワイパーという単語を聞いても、山田さんにはしばらく彼の言っている意味が分からなかったそうである。

しかし、やがて画伯は彼の讃辞の真の意味を理解し、そして仰天することになった。このトラックの運ちゃん、この絵を、雨降りや埃のひどい日にワイパーを通してみえるオーストラリアの風景の写生として受けとり、その発想に驚嘆していたのである。山田さんが、いくらこれは扇というものの形で、日本の伝統である扇画面なのだ、と説明しても、彼には分からなかったという。

彼は、彼の座標軸に沿ってその絵を鑑賞したのだ。そして、もしかするとそっちのほうが、現代的でインターナショナルな座標軸なのかも知れないのである。

現に私などもこの話を聞いてしまったばかりに、ワイパーを連想せずに扇画面を眺めることができなくなってしまう。特に、その余白の部分に蠅がとまって動いているのを見たときなど、心からナルホドと思ったものである。

——それにしても、座標軸のちがいというのは、文化がちがうところにだけあるのではないようで、そこがまた面白い。

このあいだ電車の吊皮につかまっていたら、前の席で主婦らしい二人連れが話をしていた。片方がしきりに自慢しているのは、子どもではなくて自分が飼っている九官鳥らしい。

「それがね、実にふしぎなのよ。人が訪ねて来て、インターホンを押す前に、もう『ハーイ』って返事をするの。『ハーイ、どなたさま?』って、私の真似して何度も何度も叫び出すと、必ずしばらくしてからピンポンって、チャイムが鳴るのよ。そして今度は私がほんとに『ハーイ、どなたさま?』って言うことになるの。……ふしぎでしょう。どうして客が来るって、分かるのかしらね。もう可愛くって、可愛くって……」

しかし、相手のほうはこの話、さほど面白いとも思わないらしく、「ああそうだったの。九官鳥を飼ってたの……」と、何やらつまらなそうである。一方はさらに夢中になって、

「ほら、よくナマズか何かが地震を予知するって言うでしょう。そんなのより、うちの九官鳥のほうがすごいわよ。バタバタ騒ぎ出すと、そのあとで必ず地震があるんだから。だから、騒いでるな、アー地震が来るな、ってひとより先に心の準備ができるわけ。……お客だってそうよ、アー誰か来てチャイムを鳴らすんだなって、心の準備ができるから、とっても便利。……超能力もっているようなもんよ」

ところが、相手はこう言ったのである。

「……そう。九官鳥の声だったのオ……実はね、申訳ないんだけど、みんなで噂してたのよ。チエおくれのお子さんがいて、お宅は気の毒だって。……だって、きくわけにもいかないでしょ。あんまりすごい声だしさア」

——これをズケズケした調子で言うものだから、殺気に似た気まずい空気が流れ、前に立っているのも厭になるほどだった。だから場所を移動してしまったので、そのあとどうなったかは知らない。



とにかく、九官鳥の飼主である女性が驚嘆していたとおり、鳥に流れる時間は、人間に流れる時間と少しちがうらしい。感覚の問題なのかも知れないが、結局は同じことだろう。

少年時代から熱愛した昆虫採集と植物採集に八十を過ぎてなおとり憑かれている、西独の作家エルンスト・ユンガーは、オジギソウが芝生のように群生している平野を横切ったとき、この植物の示した動きに驚嘆して次のように書いている。

この植物の動きを見て感じた私の奇異の念は、動物の動きから感じるものよりはるかに強かった。オジギソウの能力が植物一般に備わっていたなら、われわれの世界はどんなに変わった様相を呈していることであろう。

『小さな狩』人文書院

オジギソウが人を驚かすのは、この植物が、感覚をもっていることをはっきり示すばかりでなく、人間と同じ時間がこの植物にも流れていることを、はっきり示すからである。

植物には珍しく、オジギソウの動作は肉眼で明確に分かる。ユンガーが、ほかの植物一般もオジギソウみただったならこの世はどんなに変わっていただろうというときに彼は、植物がいっせいに、まるで動物のように肉眼ではっきりと分かる動きをしはじめた世界を夢想しているのである。

しかし、時間軸を少し変えさえすれば、いまだってすべての植物は驚くべき動きをしているのだ。それを肉眼に見えるようにするのが、微速度撮影であって、私はこの種の映像を見るたびに、いつも心底から驚嘆する。職業柄ふつうの人より見る機会が多いから、いつも驚いてばかりいることになり、ついにはわが心の座標軸ま

で狂ってしまうのではないかと心配なほどである。

最近見て最も驚嘆したのは、アメーバの中の細胞性粘菌という属の生態を撮った映像であった。彼らはふだんは単細胞生物であるが、食物が不足してくると互いに化学的な信号を送り合って凝集し、ナメクジのような生きものをつくる。やがて動きをとめて、全く植物のかたちになり茎をのばす。茎のてっぺんでは胞子がつくられて、時期を待つ。そして環境が好転すると胞子はばらまかれ、再び単細胞生物として暮らすのである。

オジギソウの比ではない。彼らの姿はあるときは植物に、あるときは動物に、絶えず無気味に変容しているのだ。こういう映像をみると驚嘆はするが、一方で、もしかするとこれは禁断の映像なのではないか、と不安にもなるのである。時間軸をいじくって肉眼で見えないものを見る、というのは一種、タブーをおかすことなのではないか。

事実、微速度撮影のおかげでその人格を批判され、本人としては心外にちがいない非難を浴びた人がいる。

將軍、山下奉文である。

シンガポール陥落のとき、降伏した敵将バーシバルを相手に、彼がせわしく机を叩きながら烈しく難詰している姿は、当時のニュース映画で紹介され、勇姿として銃後の日本で評判になった。

ところが、戦犯裁判のときにこの机を叩いたアクションが、きわめて不利な材料となったという。降伏を申し出た敵将に、ああ威丈高にふるまうのは、騎士道にも武士道にも反する、軍人としての人格が疑われる、というのである。

しかし、戦後も相当経ってから明らかにしたのは、あれが駒落とし、つまりふつうよりゆっくりした回転の微速度撮影で撮られたという事実であった。あの会談の場所が室内で暗く、照明も用意できなかったため、毎日の稲垣カメラマンが回転を落として撮ったということが分かったのである。

レンズの絞りを限度まで開けても追いつかないほど暗い場所です適正露出を得るためには、フィルム回転を落とすほかない。カメラマンがそれをしたのは仕方なかったかも知れないが、時間軸を操作した結果、上映したときの人物の動きが不自然に速くなってしまった。それ故、間をおいて机を叩いたのが、立てっづけに机を叩

いたことになり、ゆっくりした物言いが列しい難詰に変化し、総体として「威丈高」の印象を生んだのだとすれば、故人の名誉のためにも、これから機会あるたびに注釈を加えるべきであろう。あれは微速度撮影であった、と――。

やはり、一部の科学的な映像を除けば、やたらに時間軸をいじくるのはタブーなのである。



微速度撮影というのは、言ってみれば砂時計をいろいろに傾けて砂の落ち方を調節し、時の流れに手を加えるようとしているようなものだが、その砂時計が完全に倒れ、そして時の流れもまるで止まっている、というような場所に立ったことが何度かある。――廃墟である。

廃墟もそれぞれの表情をもっているが、残忍な行動をしていた場所の廃墟には、必ず残忍な表情が残るものだ。戦前から極秘で毒ガスをつくっていた秘密工場が、瀬戸内海に浮かぶ広島県の大久野島にあって、戦後破壊されて廃墟になった。そこを戦後十七年も経ってから訪ねてみたことがある。

驚かされたのは、コンクリートの壁に残っているしみの、見たこともない邪悪な色と、そして形であった。終戦のとき四千トンもの毒ガスが貯蔵されていたタンクの壁は、洗っても洗っても落ちないマクベスの掌の血のような邪悪で執拗なしみに染まり、十七年を経たその時もなお、かすかにイペリットの臭いを漂わせていたのである。

この毒ガス工場では、どの建物のなかでも小鳥が飼われていたという。鳴き声を楽しむためではない。小鳥が死んだら空気中の毒ガスの濃度が濃くなった証拠なので、総員戸外へ退避するためであった。記録によると、小鳥は毎日のように死んだという。

軍は、毒ガスを暗号名で呼んだ。暗号にはぜんぶ色の名前がついていた。

黄一号は、イペリットのことであった。糜烂性のルイサイトは、黄二号と呼ばれた。それぞれ、ドイツ式とフランス式があって、甲乙で区別された。青酸は茶一号であり、クロールアセトフェノンは、緑一号という名前

であった。

小鳥の鳴き声もきれいだっただし、製品の暗号名も華やかな色の名前で美しかった。しかし、毒ガスの蒸気をたっぷり吸ったこの廃墟の壁は、何処よりもアウシュビッツのガス殺人室の壁のいろに似て、その前に立ったただけで一種の悪寒に襲われるのであった。

——そして私はことし二月の末、遠くからみると「桜の森の満開の下」かと見まがうほどに美しいアーモンドの花ざかりの季節に、スペインのベルチテの廃墟を訪れた。

サラゴサから南へ六十キロ、一時は人口一万五千の町であったベルチテは、もう半世紀も前のことになるスペイン市民戦争がいかに激しくむごたらしい戦いであったかを、いまも生々しく証言している場所である。何しろ徹底的に廃墟となったその町なみが、二つの教会と修道院の跡もろとも、その瞬間に時間が止まった状態で残されているのだ。

一切手を加えず、全体を凄絶な記念碑として保存するようにと命じたのは、フランコである。ベルチテの町は、フランコにとって死守しなければならぬ要衝であった。そして退却と奪回を繰り返した末、町全体が瓦礫の山となった。戦いが終わってこの徹底的な廃墟を見たとき、フランコも万感迫る思いだったのだろう。スペイン人同士が戦ったスペイン市民戦争というのは、結局最初の「ベトナム戦争」だったのだから——。

最初ここは六千の住民と、ナチスドイツの支援するフランコ軍六千がたてこもり、それをスターリンのソビエトが支援する三万の国際旅団が包囲する、というかたちで戦闘がはじまった。一旦は国際旅団が占拠したが、ドイツの爆撃機による空襲の成果もあって、フランコ軍は奪回に成功、あらゆる水路を切って周囲を洪水にし、戦車が襲来できないようにした。しかし占拠と奪回は繰り返された。

夜になると懐中電灯で敵軍にモールス信号を送る内通者がいたり、地下道を掘って家から家へ移動し、最終的に姿を消す裏切者が続出するから、奪回のたびに家々の地下室を破壊し、子どもらまで処刑しているうち双方それぞれ六百人以上の容疑者を抹殺、度重なる空襲と砲撃で、屋根が抜けていない家は全く一軒もないという徹底した廃墟になった。

——こんなすさまじい廃墟は、いまどきほかにないんじゃないか、などと言いながら夕暮れ撮影を終わった私たちがボーツと廃墟にたたずんでいたら、突然にぎやかな子どもたちの声がして、ふり返ってギョツとした。巨大な化物めいた顔がユラユラしているのである。……子どもたちのカーニバルの行列が廃墟を通るのだ、ということが分かるまでに相当の時間がかかった。

ここを廃墟として残すために近くに移住させられた生き残りの町民の子どもたちが、カーニバルのときだけ、廃墟を通るのだという。

砂の落ちてしまった砂時計を突然ひっくり返したみたいに、また時間が流れはじめたのである。それが仮装行列のときだけ、というのがまたグロテスクだが、砂の落ち終わった砂時計を墓の前で高く尊大にかざしている、十五世紀に描かれた死神の絵のように、砂時計というのは、西洋では死神の持道具の一つなのだそう。

日本で強いて探せば、亡き圓生師匠の十八番「死神」のロウソクにあたるのだろうか。

「……ほら、ほら、消える。ほら、ほらほら……あア……消えた」

というような名調子が、砂時計をめぐって西洋にもあるのかどうか。たとえば、

「……落ちらア落ちらア……落ちらア……はア、お終えた」……などと。

——十三世紀に書かれた『パリの家事』という本によると、良い砂時計の砂を得るためには、黒大理石の鋸くずを葡萄酒で九度煮つめ、九度浮きかすを取り除き、九度日干しにしなければならぬのだそうである。

しかし、そんなめんどろなことをせず、天然の砂で最高の砂時計の構造をつくっている生物がいる。——ア

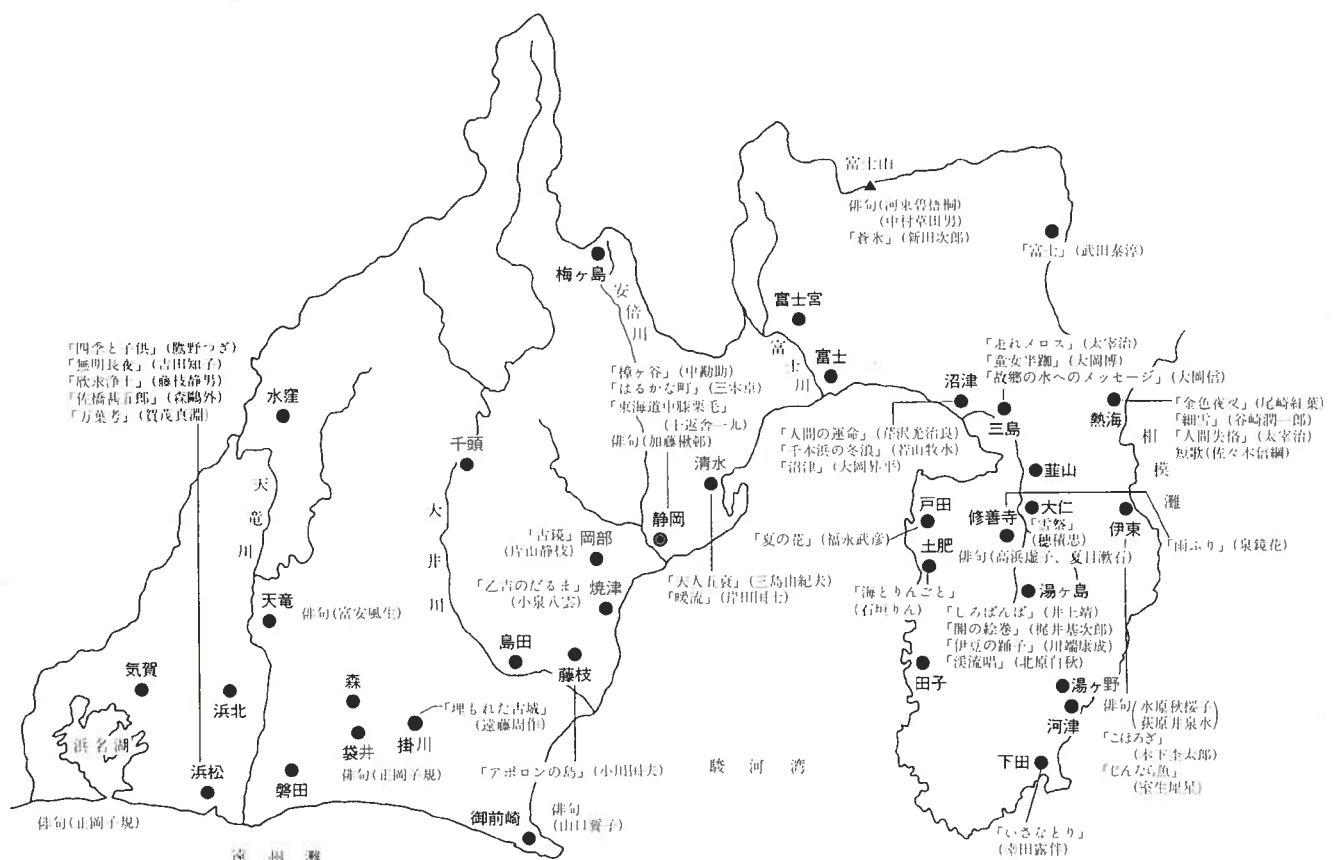
リジゴクである。

アリジゴクは、砂時計がつくるのと同じ角度の、すりばち状の穴をつくる。それなのに砂が落ちないのは、自分分が底で鉄を開いて、砂の限界角度を支えているからである。その縁にアリが来ると、限界を越えるから斜面が崩れ、砂と共にアリはなだれ落ちて行く。

だからアリジゴクの体を抜けば、あのすりばちがとめどない砂時計になるのだと思うと、何となくめまいがする。さらに、この寧猛なアリジゴクが三年ののちに成虫になった姿が、あの短命で薄命なウスバカゲロウなの

だと思^{おも}うと、この世^せ界^{かい}全^{ぜん}体^{たい}が傾^{かたむ}いた、巨^{きょ}大^{だい}で異^い様^{よう}な砂^{すな}時^ど計^{けい}のよう^{よう}に思^{おも}えて来^きて、この上^{うへ}なく無^ぶ気^き味^みな気^き分^{ぶん}になっ
て来^くるのである。

(近代文学)



**伊豆文学フェスティバル
実行委員会事務局**

〒420 静岡県静岡市追手町9番6号
静岡県教育委員会文化課文化企画室内
TEL (054) 221-3109 FAX (054) 250-2784

**The Secretariat for the Executive Committee of
the Izu Literature Festival**

The Culture Planning Section
The Culture Department of Shizuoka Prefectural Board of Education
9-6 Ohte-machi, Shizuoka-shi, Shizuoka-ken 420, Japan
Tel: 81-54-221-3109; Fax: 81-54-250-2784